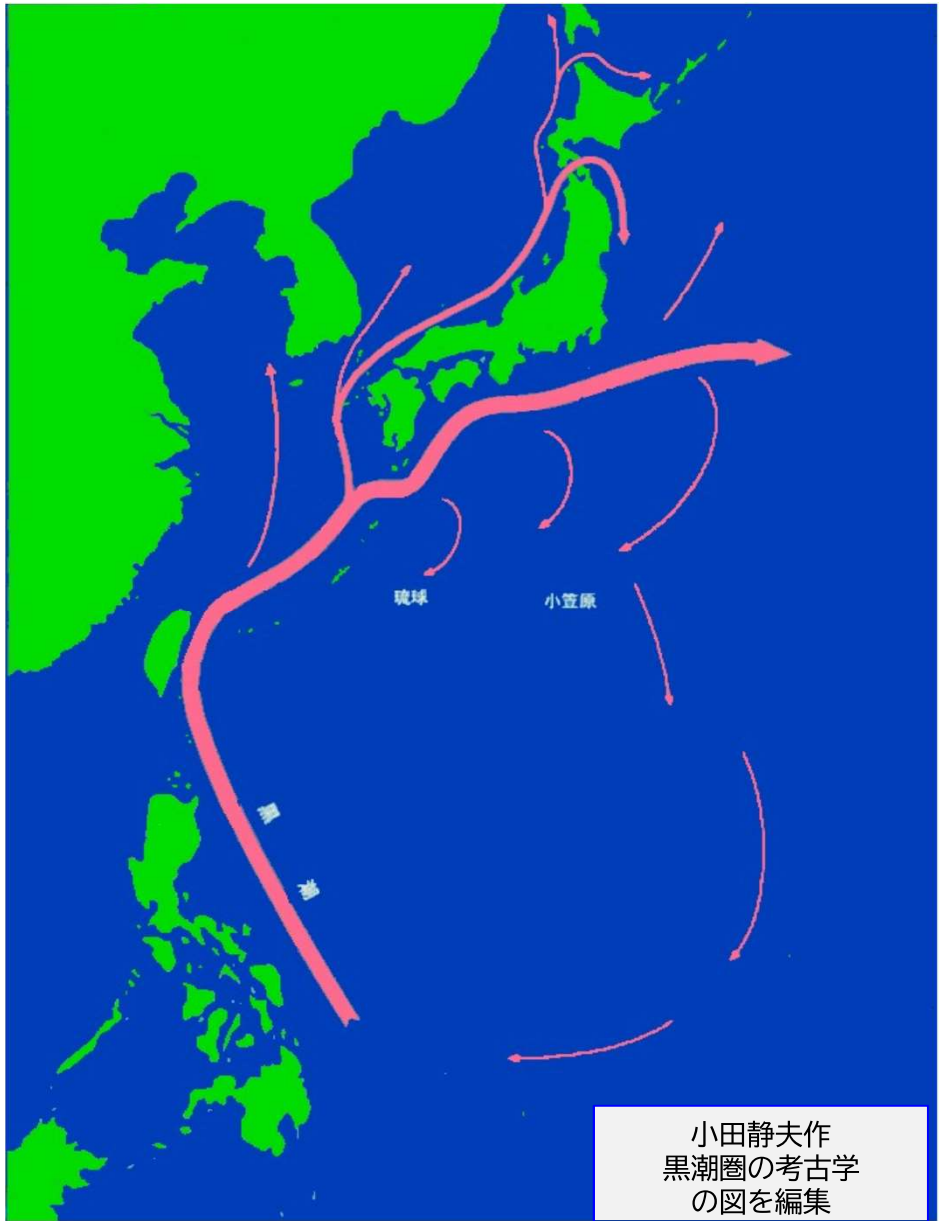
日本古代史ネットワーク

解明委員会　第7回・基本レポート

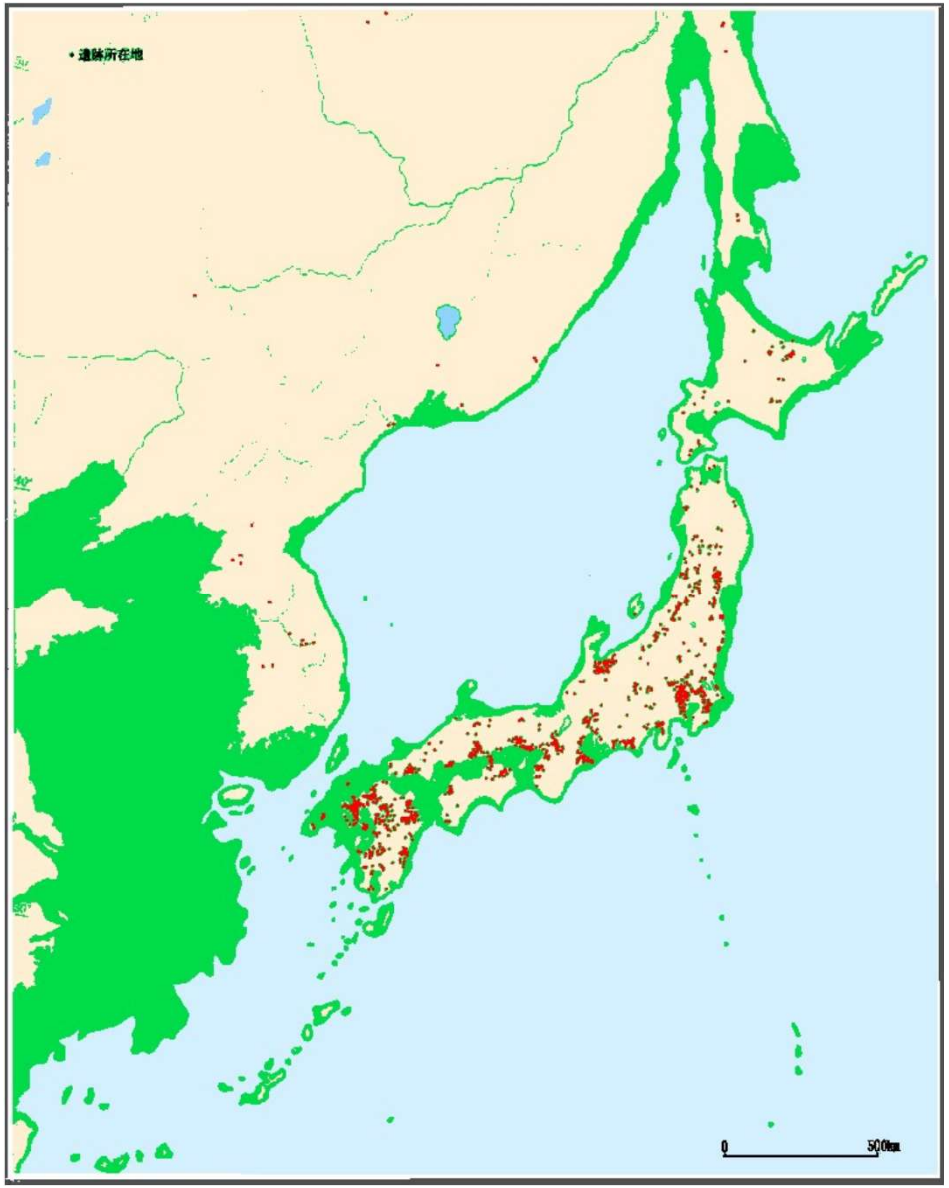
大陸との交流　：　徐福論

2021年6月26日

丸地　三郎



小田静夫作
黒潮圏の考古学
の図を編集



大陸との交流

- 4万年前　　：スンダ大陸から沖縄列島・日本列島へ、日本人の祖先（旧石器人・縄文人）到来
- 3万5千年前：本州から北海道へ移住。当時、北海道はサハリン・シベリア大陸と地続き
- 3万年前から2万年前：北海道から日本人の祖先がサハリン・シベリア大陸へ進出
  - » サハリン・シベリアへは、北海道白瀧村の黒曜石で作った石器をもって進出。
    - サハリン・シベリアでの日本人祖先の居住は続く。
- 2万年～1万年前　：朝鮮半島・シベリア（ウラジオストック）へ、九州腰岳産・隠岐産の黒曜石が進出
- 7千年前　：翡翠・漆などが長江河口域へ輸出される
  - » 7千～6500年前　：玦状耳飾りが河姆渡など中国本土と日本で同時流行
- 7千年前～390年前　：中国で、沖縄産の宝貝が貨幣として使用される。1630年代で生産途絶
- 2500年前　：中国春秋の呉が滅亡。難民が朝鮮半島へ。縄文人が難民と水田稲作を日本へ導入
- 2300年前　：中国から徐福一行渡来。
  - ・渡来弥生人となり、先住民を制し、倭人・日本人として日本を支配。
  - ・同時期に朝鮮半島南部に上陸し、半島南部でも弥生文化成立
- 2000年前～：中国漢王朝に日本から朝献。57年・107年・238年等　倭の五王朝献

- 663年　　：白村江の戦い。百済滅亡。在韓の倭人と百済人等が日本へ移住・亡命
- 666年　　：高句麗滅亡。高句麗（高麗）人日本へ亡命
- 1274・1281年　：元寇：文永の役・弘安の役。
- 1264・1284-86年　：モンゴルの樺太侵攻　元朝による樺太アイヌ（骨嵬）への攻撃

日本海

RUSSIA
Sea of Okhotsk
Lake Baikal
Irkutsk
Chita
Shilka
Ingoda
Onon
Argun
Zeya
Selemdzha
Amgun
Komsomolsk-on-Amur
Bureya
Sakhalin
Straight of Tartary
Blagoveshchensk
Hailar
Ulan Bator
Kherlen
Lake Hulun
Nen
Amur
Khabarovsk
Qiqihar
MONGOLIA
Songhua
Ussuri
CHINA
Harbin
Jixi
Mudanjiang
Changchun
Jilin
Khanka Lake
Vladivostok
Shenyang
Sea of Japan

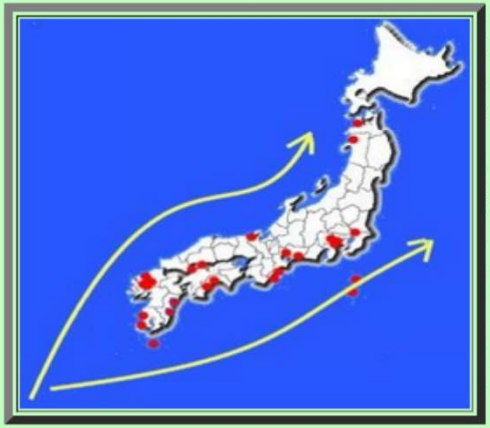
徐福伝説・日本

日本全国の徐福伝説地一覧

徐福伝説があり，歴史的人物として紹介している市町村へのリンク
（●が徐福伝説がある地域　図中の→は海流を示す）

青森県北津軽郡小泊村（尾崎神社・熊野神社）
秋田県男鹿市（赤神神社）
京都府与謝郡伊根町（新井崎神社）
山口県豊浦郡豊北町（土井が浜）
山口県熊毛郡上関町祝島
福岡県筑紫野市（天山）
福岡県八女市（童男山 古墳）
佐賀県杵島郡山内町（黒髪山）
佐賀県伊万里市波多津町（焼き物）
佐賀県武雄市（武雄温泉）
佐賀県佐賀郡諸富町（浮盃）
佐賀県佐賀市金立町（金立公園・金立神社）
佐賀県佐賀郡富士町（古湯）
鹿児島県　坊津町

神奈川県藤沢市（妙善寺）
東京都青ヶ島（織物）
東京都八丈島（織物）
山梨県・静岡県（富士山＝蓬莱山：不死山）



宮崎県延岡市（蓬莱山・徐福岩）
宮崎県宮崎市住吉（はまゆう）

山梨県富士吉田市（甲子神社・聖徳山福源寺・富士古文書）
山梨県南都留郡河口湖町（浅間神社・徐福社）
山梨県南都留郡山中湖村・長池村
静岡県清水市三保松原
愛知県宝飯郡小坂井町（蒐足神社）
愛知県名古屋市熱田区（熱田神宮境内＝蓬莱山・雲見山）
三重県熊野市波田須（徐福宮）
和歌山県新宮市（徐福公園・阿須賀神社・徐福宮）
高知県高岡郡佐川町（虚空蔵山）
高知県土佐市
高知県須崎市
広島県佐伯郡宮島町（厳島神社・聖崎蓬莱山）
鹿児島県　屋久島・種子島
鹿児島県いちき串木野市（冠岳）

この表の作成のため中日新聞2000.8.12を参考にしました

- 韓国に2ヶ所、日本全土に20ヶ所ほどに、徐福到来の伝説がある。
- 不老不死の薬を求めて、上陸し、発見できず、その地で死亡との内容の伝説がほとんど。
- 各地は黒潮・対馬海流に沿った地域。
- 背後に山があり、水田耕作の適地がある。
- 佐賀県・山梨県に、記録が残る。

http://www.asukanet.gr.jp/tobira/jofuku/jofuku.htm　古代史の扉より

中国 ： 文献史料

- 「史記」：司馬遷著 （紀元前91年頃に成立）

秦始皇 本紀 - 中国史春秋戦国 等より引用・追記
gongsunlong.web.fc2.com › sinsikou-h

☆ 秦始皇本紀（第6）に3ヵ所に登場する。

- 始皇帝二八（紀元前219）年

  •斉人徐市等上書して言う、海中に三神山有り、名つけて蓬莱・方丈・瀛洲と曰ふ、僊人之に居る。請ふ斎戒して童男女とともに之を求むることを得ん、と。之に於いて徐市をして童男女数千人を発し、海に入りて僊人を求めしむ。　　徐市＝徐福　　僊人＝仙人

- 始皇帝三五年（BC212）年

  •徐市等は費やすこと巨万を以て計えども、終に薬を得ず。徒に姦利をもて相告ぐること日に聞ゆ。

- 始皇帝三七年（BC210）年

  •方士徐市等、海に入りて神薬を求め、数歳なれど得ず。費多く。譴められんことを恐れ、乃ち詐りて曰く、「蓬莱の薬、得可し。然れども常に大鮫魚に苦しめらる。故に至ることを得ざりき。願わくは善く射るものを請ひて與に俱にせん。見（あら）はれなば、則ち連弩を以て之を射ん」 始皇、夢に海神と戦い、人の状のごとし。占夢博士に問う。曰く、「水神は見るべからず、大魚蛟龍をもって侯（側近の意？）となす。今、上、禱司（とうし）備わり謹めり。而るにこの悪神あり。除き去るべし。而らば善神、致すべし。」すなわち海に入る者をして巨魚を捕うる具をもたらしめ、而して自ら連弩をもって大魚の出づるをうかがいて、これを射んとす。琅邪より北のかた栄成山に至る。見えず、之罘（しふ）に至りて、巨魚を見る。射て一魚を殺す。ついに海に並（そ）いて西のかた平原津（しん）に至りて病む。

☆ 淮南衡山列伝（わいなんこうざんれつでん） 第五八の伍被の供述書（紀元前122年頃）

- 昔、秦は先王の道を絶ち、（中略） 又、徐福をして海に入って神異の物を求めしむ。還りて偽辭を爲して曰く、「臣、海中の大神を見る。言って曰く、「汝は西皇の使か」と。臣答へて曰く、「然り」と。「汝は何をか求むる」と。曰く、「願わくは延年益寿の藥を請はん」と。神曰く、「汝が秦王の礼薄し。觀ることを得れども取ることを得ず」と。即ち臣を從えて東南のかた蓬山に至り、芝成の宮闕（きゅうけつ）を見る。使者あり、銅色にして龍形、光上つて天を照らす。是に於いて臣再拜して問うて曰く、「宜しく何を資つてか以って獻ずべき」と。海神曰く、「令名の男子、若び振女と百工の事を以てせば、即ち之を得ん」と。秦の皇帝大いに説び、振男女三千人を遣り、之に五穀の種と百工とを資して行かしむ。徐福、平原広沢を得、止まり王となりて來らず。是に於いて百姓悲痛し相思いて、乱を爲さんと欲する者、十家にして六あり。

徐福論をトンデモ「研究」とする批判

- 熱心な徐福ファンは、「稲作や漢字をはじめ数々の先進文化を日本に伝えたのは徐福だ」とか、「日本人は徐福の子孫だ」とか主張します。
  - しかし日本最古の稲作遺跡である佐賀県の菜畑遺跡は紀元前500～600年のもので、始皇帝や徐福の時代より200年以上も前のものです。
  - また現在発見されている、漢字が書かれた最古の出土物は、吉野ヶ里遺跡出土の紀元前1世紀の前漢時代の銅鏡ですが（これでも徐福の時代からは100年も後です）、
  - 5世紀頃から日本も本格的に漢字を用いる時代になったと考えられています。
    - つまり徐福の時代から800年も漢字文化が日本に根付いていなかったわけで、日本の漢字文化の発祥を徐福に求めるのは無理がありすぎます。
  - また仮に日本人のルーツが中国大陸から渡来した人であったとしても、それを徐福一人に帰するだけの物証は何もありません。

- その上中国や日本の古代文献は、神話と歴史がない交ぜになっているのが特徴であり、・・・・・・・・・
  その記述が本当に信用できるのか 慎重に吟味しなければ、信用に値する学説にはならないのです。

- 徐福の周囲にはこういう**史料批判の精神**がすっぽり抜け落ちている、安易な議論ばかりが渦巻いているので、プロの学者はそれを嫌って近づこうとはしないのです。

- 下記のホームペイジより引用
  - http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/chubun/ohno/shinwa.htm
    - トンデモ「研究」の見分け方・古代研究編 :中間目次 :古代を扱った主な「研究ごっこ」のテーマ :
    - 古代神話は史実を反映している？
    - このページは朴斎主頁内のコンテンツです。All right reserved COPYRIGHT（C） 200

徐福論：最初の個人的印象

- 日本徐福伝説は、
  - 20数か所にのこるが、全ての場所に徐福本人が来たとされており、不審な記述。
  - 薬草を探しに来たが失敗したと共通する。 しかし、実在を裏付ける有力な証拠に乏しい。
- 中国側の文献の「史記」は、正式な国史で、高い信頼性を持つ文献であるが、疑問な点も多い。
  - **徐福を送り出した目的**：始皇帝自身が、巨万と云うほどの費用を出してまで、薬草を取りにやらせたとするのは、納得行きかねる。
  - 出航後約8年たって、**徐福が手ぶらで戻ったことを、始皇帝が咎めない。**しかも、連弩等の武器を持たせて再び、出航させたことは、理由が判らず、納得が行かない。
  - 徐福の出航を見送った人々の子供がまだ生きているような時代に、著者の**司馬遷**が現地を数度訪問にも拘らず、明瞭な目的や納得できる理由が記述ができなかったことは、不思議なことと云える。
  - 中国でも、伝説と見られてきたこと（事実とは考えられてこなかったこと）には、十分理由がある。

- 前頁の徐福論批判は、論理的にも整っており、秀逸な文章と云える。
  「史料批判の精神がすっぽり抜け落ちている」との指摘には、耳が痛い。
  - **最初の水田稲作**は、徐福以前に、開始されている。
  - **漢字の開始時期**は、5世紀頃からで、徐福到来の時期からは、余りにも遠く離れている。
  - 仮に**日本人のルーツ**が中国大陸から渡来した人であったとしても、それを徐福一人に帰するだけの物証は何もありません。

☆ 不審な点や疑問点の多い中で、「史料批判」を行い、具体的な証拠を求め、徐福論の真偽を検討して行きたい。

- **中国側の具体的な証拠**
- 最初の**水田稲作開始時期**と徐福到来時期の差
- **漢字の使用**に関して、時期を見直す証拠
- 徐福一人に、**日本人のルーツ**を帰する物証

- 上記を念頭に置いて、徐福の到来した後の大きな変化から見てゆく

縄文時代から弥生時代へ変化

世界史の時代区分の常識では、石器時代→青銅器時代→鉄器時代　の順序。
日本では、石器時代から一気に金属器（青銅器＋鉄器）の時代に代わる。 世界史上稀な現象。

ー　急激な変化　ー

- **人口** ： 縄文時代も弥生時代にも、日本全土に縄文人が居た。（北海道だけは、弥生人の記録は無い。）
  - 縄文時代は、凡そ4万年前の旧石器時代から3万7-8千年継続し。**縄文末期の人口推定は約10万人**
  - 弥生時代は、紀元前2-3百年から西暦300年頃まで、凡そ500年、**弥生末期の人口推定は100万人以上**
- **体形・骨格** ：
  - 縄文人はやや背が低く、手足が長く、短頭で、顔の彫りが深い
  - 弥生人は、背が高く、長胴短足、長頭で、顔の作りはのっぺり形
    - 弥生以降現代まで、上記二つの体形の中間型が多くなり、地域差がでる。
- **言語** ：
  - 縄文人はアイヌ語と同類のものを使用し、
  - 弥生時代の末期には、倭語＝日本語が標準に変化。
- **水田稲作**：・ 西暦元年には、青森県で本格的水田稲作の遺跡あり、短期間で一気に拡大。
- **墓制** ：・ 縄文時代は、土壙墓。 末期に、九州北部で、支石墓
  - 弥生時代は、**甕棺墓**、木棺墓、石棺墓
- **武器** ：
  - 縄文時代は対人戦闘用は無し。 矢じりは小型石鏃
  - 弥生時代は、多種の青銅製武器、鉄製武器が多く出土。矢じりは、大型石鏃、青銅又は鉄製の鏃
- **土器** ：
  - 縄文時代は、縄文式土器。 末期に突帯文式土器・黒陶が九州北部で使用される。
  - 弥生時代には、**弥生式土器（遠賀川式土器）**が使用され、須恵器等に進化。

縄文から弥生の変化は「大変革」

- 縄文時代から弥生時代の変化は大きい。
  - 主体となる**住民がとって替わった。**
  - **母国語が、置き換わった。**
    - 変化の期間は短い。200～250年間程か。（象徴的な水田稲作は、一気に青森まで広がった。）
      - 根拠 ： 新住民の特徴が完全に変わった：
        - 体形・顔つき ・ 言語 ・ 墓制 ・ 土器 ・ 武器
        - 主要産業 ； 栽培・採取型農業から、水田稲作農業へ
        - 社会構成 ； 狩猟採集社会から 税制・軍制・外交機能を持った王制へ

- 日本に、別の民族が来て、先住民を駆逐又は支配して、（北海道を除く）全土を支配下に置いたことを示している。この民族は、倭語を使う倭人。
  - **倭語：日本語**と云う単独の言語に一気に置き換わったことは、大量の倭人が、武器と生活手段を持ち、現地人を圧倒して移り住んだことを示している。
    - ✓ **少数の異民族が、時期を隔てて、渡来した場合には、原住民に排除される**か、組み込まれる。
    - ✓ 旧石器時代から日本に居る縄文人は、世界に先駆け磨製石器を使い、往復外洋航海を実施した民族。 このような**優秀な民族が、少数の渡来民に駆逐されることは有り得ない。**
    - 母国語が替わることは、民族とその文化が失われることを示し、縄文人の文化は、失われた。
      - » **中国人が、日本に渡来したのならば、中国語を話すはず**との主張があるが、
        - 渡来人は、倭語＝日本語を話した。
        - その渡来人は、何処から来たのか？
    - ✓ 中国から来たのならば、なんで、そういうことが起きたのか？ 説明できなければならない。

弥生渡来人の渡来元について、調べてみる必要がある。

弥生渡来人が海外から移住して来たのならば

九州に来た弥生渡来人は、後に倭国として中国の漢・後漢・魏と外交関係を持つ、その後、奈良に生まれた大和朝廷も、当初は倭国を名乗り、後に「日本」と名乗った。 この大和朝廷をつくった倭国・倭人について、検討する。

- 倭人の渡来した元の場所はどこか？
    - 同一の**体形＝骨格をした民族**は何処にいたか？
    - **甕棺の墓制**を持つ民族は何処にいたか？
    - 日本で栽培された米と**同じ品種の米**は何処で栽培されていたのか？
    - **倭語＝日本語**を話す民族は存在しえたのか？
    - **同一の遺伝子**を持った民族は何処にいたのか？
    - ✓ 徐福は、上記の条件を満たしているのか？

- 弥生時代末期までに百万人超の人口となることができるのか？
    - 埴原 和郎氏の論では、100万人の渡来人が来たとされるが、
    - 何人の倭人が来たら、500年程後の弥生末期に100万人の人口となれるのか？
- 弥生人のDNAは？
    - 中国にそのDNAは有るのか？
    - 中国大陸に、弥生人のDNAの痕跡は有るのか？
- 大人数で、海に囲まれた日本に渡来したのならば、
    - 船と航海の技術をもっていたのか？
- 渡来した倭人は、漢字を理解し、使えたのか？
    - その証拠は有るのか

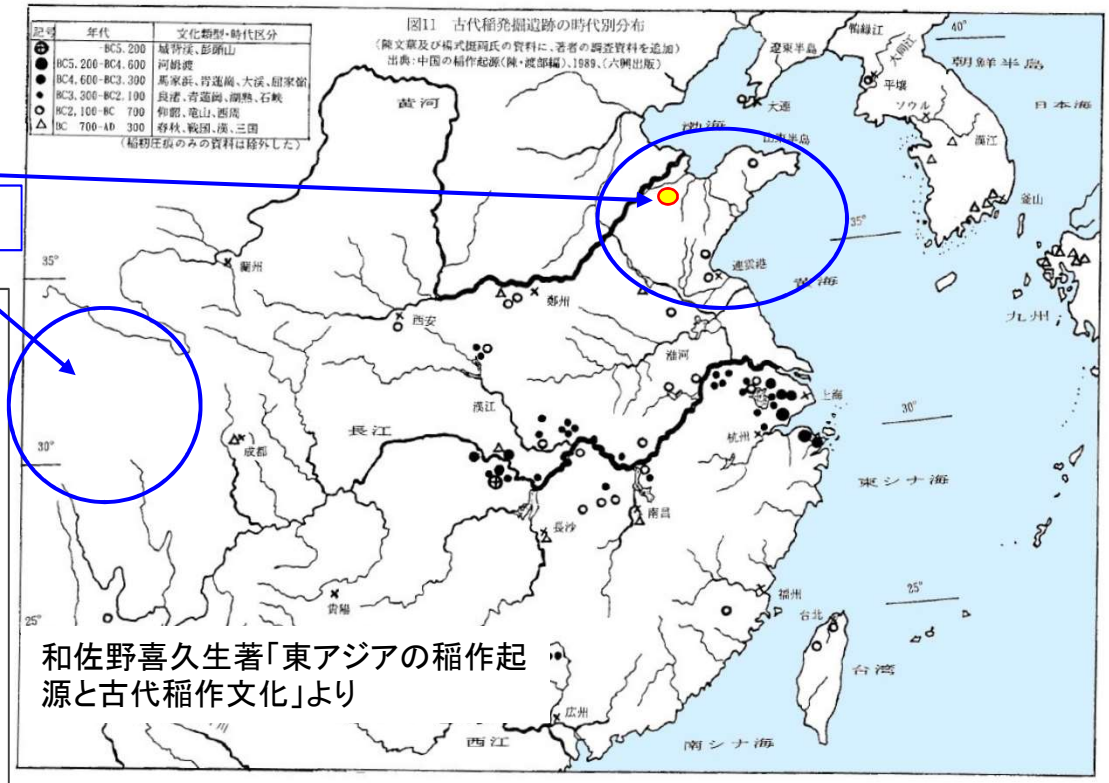
➢ 更に発生する疑問は？

弥生渡来人と似た骨格を持つ人が出土した遺跡

- 2018年01月24日　古代史ニュース＞西日本新聞ニュース＞北部九州の弥生人 「戦乱逃れ渡来か」
  - 土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム(山口県下関市)館長の松下孝幸氏は「弥生人と卑弥呼」のテーマで講演。
    - 日本人は昔から顔の彫りが浅いと思われがちだが、縄文人は彫りも深く、鼻もヨーロッパ人のように高かったとみられる。
    - 土井ケ浜遺跡(山口県)から出土した300体以上の弥生時代の人骨は、顔が長く、鼻が平らで、高身長。縄文人とは全く異なり、中国大陸からの渡来民という仮説が出た。
      - 北部九州の弥生人も土井ケ浜と同じ特徴を持っていて、縄文人とは違っていた。
    - 2年かけて中国大陸で人骨調査をする中で、山東省で出土した紀元前後の300体が、「北部九州・山口」の人骨と酷似していた。内陸地で黄河と長江の源流である青海省で見つかった人骨も似ていた。

山東省・臨淄

青海省



和佐野喜久生著「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」より

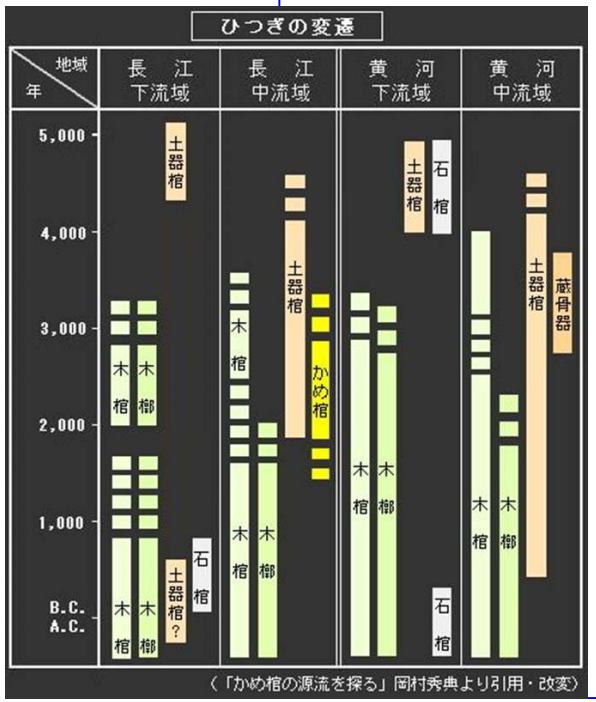
土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアムの資料・記述では、下記の書籍を参照している。

- 韓康信「山東臨淄の周-漢代人骨の形質的特定の研究及び西日本弥生時代人骨との比較研究」(『渡来系 弥生人のルーツを大陸にさぐる』、2000年)
- 中村哲也「倭人の国から古代国家へ」 小川国治編『山口県の歴史』山川出版社 1998年
  - 中国山東省の遺跡で発掘された漢代の人骨資料の中に、土井ケ浜人ときわめてよく似た形質をもつ資料が多く見つかっている

稲作の伝播と甕棺

- 長江の中流で初めて稲作が行われた。 開始した人は、倭人を含む民族。
  - 中流域では、最も古い稲作の遺跡がみつかる。
    - 最も古い稲作の彭頭山 遺跡（9000年前）、屈家嶺遺跡（5000年前）では甕棺墓が発掘された。
      - 甕棺は特異な埋葬法で倭人のものと見られる。
  - 和佐野喜久雄著「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」
    - 水田稲作の発生と伝播のルートは、長江中流で発祥し、下流に伝播した。
    - この下流域で栽培技術が進化し・発展した。 この下流域の遺跡でも甕棺が出土する。
    - 下流で発展した水田耕作の技術が逆に、中流・上流に、伝播。
    - 長江下流から北側の准河・黄河（旧河川）の流域：江蘇省・山東省へ伝播。
      - 倭人は、中流域を越え上流へも移動。
        - **四川省・雲南と、長江下流・准河・黄河の下流域の、二つのグループに別れた。**
    - 四川・雲南グループの中には、雲南の横断山脈を南北に流れる複数の東南アジアの大河の源流に沿って南下したグループが居た。
      - その一部は、ベトナムへ、タイへ、ビルマ（ミャンマー）を経由して、インド・パキスタンへ、その地で、インダス文明を築いた。インドのタミル人の遺跡には、甕棺が出土する。

伊藤　俊幸（イトウ　トシユキ）氏のHP日本 人の起源　弥生文化と渡来人の登場の図を借用



- 中国でかめ棺が見られるのは、左表（←）の黄色部分、すなわち長江中流域の屈家嶺文化から石家河文化期である。 ↓は甕棺出土遺跡

1万年～9千年前の海岸線は？

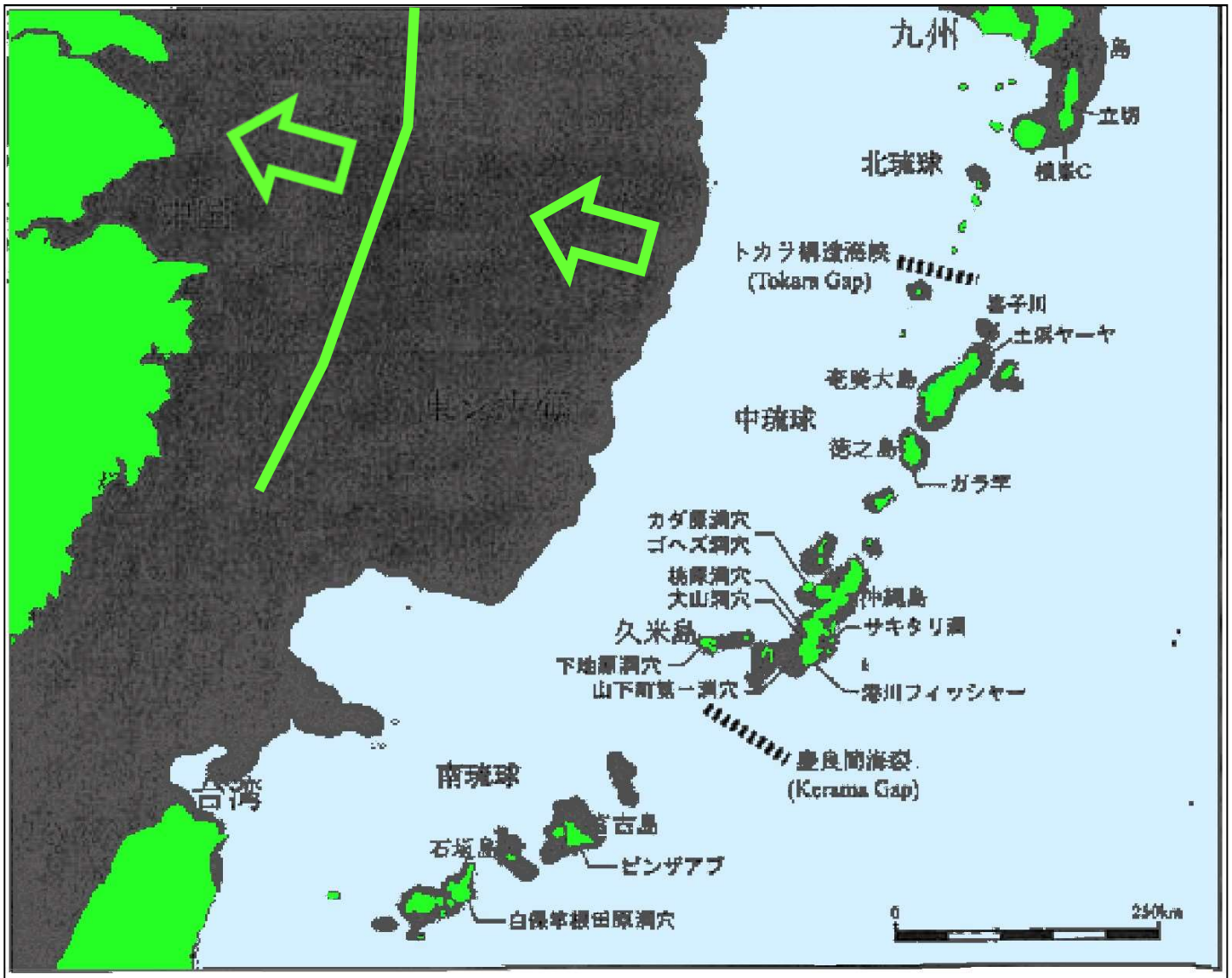


図 1　旧石器時代の琉球列島と遺跡
薄いトーンは最終氷期最盛期（約 2 万年前）の陸地

長江文明の後になっても出現する甕棺

- 黄河河口北側にある河北省黄驊市郛堤城遺跡付近で2016年に、110以上の甕棺墓見つかる。戦国時代(紀元前403年－同221年)から漢代(前漢として紀元前206年－8年)の遺跡

- 長江文明の古代中国甕棺埋葬の風習は、凡そ紀元前3000－前2000年の間に行われたが、途切れることなく戦国・漢代まで伝えられたことが判明。

- **徐福一行が渡来するBC219年頃にも、中国では甕棺埋葬が行われていたことが判明。**

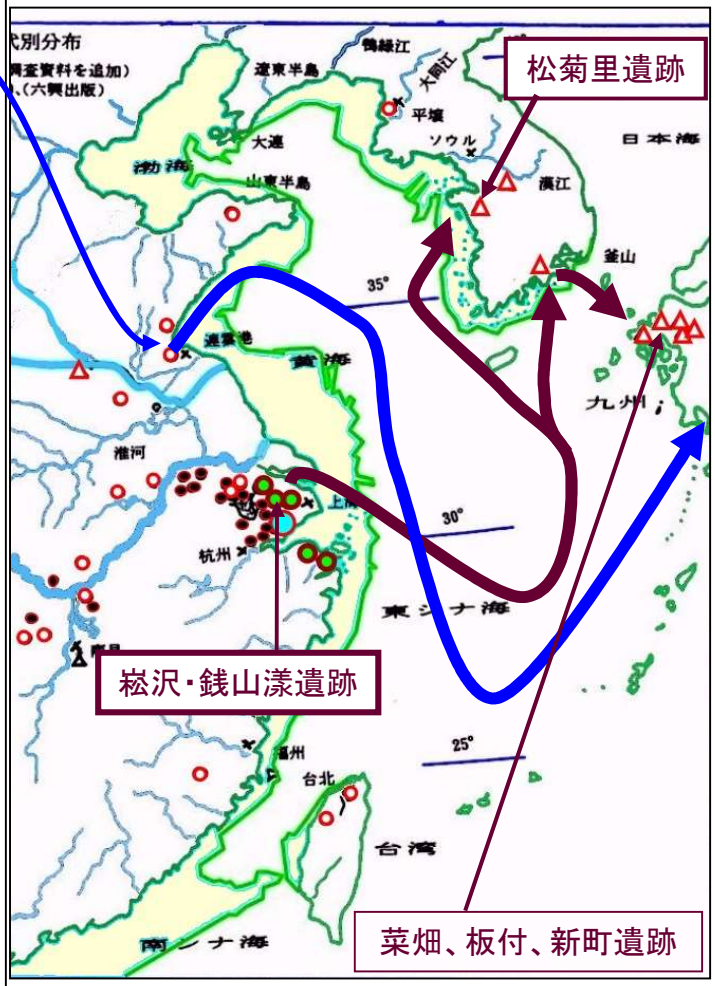
青松光晴氏の日本古代史つれづれブログ　より
https://aomatsu123.blog.fc2.com/blog-entry-177.html

日本に水田稲作(温帯ジャポニカ米)を最初にもたらした渡来人

- 紀元前500年程前に、
  - 北九州・玄界灘沿岸に初めて水田稲作が来た。
  - 唐津市の菜畑遺跡、福岡県博多の板付遺跡、糸島半島の新町遺跡など
    - 韓国の松菊里遺跡と類似の耕作方法と住居を持つ
    - 稲の種類は、***極短小粒米***で、松菊里と同一で、
      - 長江河口の崧沢遺跡・銭山漾遺跡と同一タイプ
    - 支石墓(集落の長の墓)には縄文人の遺骨が収納。
    - 長江下流から韓半島へのルートは海上ルートか？
      - 和佐野氏は、品種から、遼東半島経由の北方経由は無いと断言。
- 紀元前200年頃より
  - 九州・吉野ヶ里など有明海沿岸から筑後川上流地域に水田耕作を含む遺跡増加
    - 稲の種類は、菜畑などの稲より大きく、***小粒米***。
    - 稲の種類は、焦庄遺跡(山東半島の付け根付近)に類似
    - 埋葬方式は甕棺で、長身・長頭の弥生人

1. この水田耕作は、極めて短い期間に九州各地に広がり、
   - 日本各地に伝播した。
   - 玄界灘沿岸の水田稲作は、この時期から後、この小粒米に
   - 置き換った。
     - 玄界灘沿岸埋葬方式は、支石墓の中に甕棺が納まる、
     - または甕棺方式に変わる

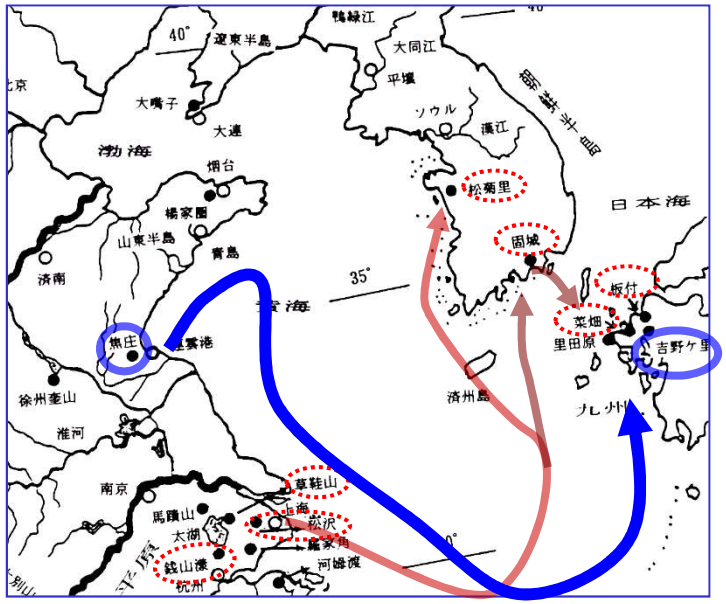
- *米に関しては、和佐野喜久生著「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」による*

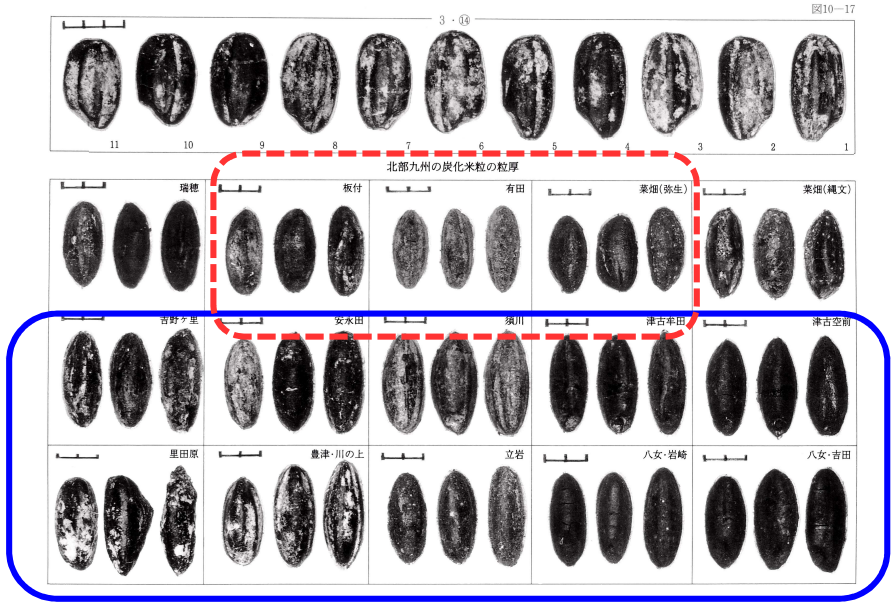


稲作・稲の種類：水田稲作をもたらした渡来人

・ 東アジアの稲作起源と古代稲作文化　報告論文集　研究代表　和佐野喜久雄　より

- ◆ 朝鮮半島南西岸から北九州への稲作の伝播は、短粒米が、崧澤・銭山漾（せんざんよう）から江南地方から伝播。韓国の松菊里・固城遺跡、玄界灘沿岸の菜畑・有田・板付遺跡で、同様の短粒米が発掘された。
- ◆ 筑後川流域に分布する須川・吉野ヶ里遺跡などの米粒特性が焦庄遺跡（徐福村に近い）のものによく類似。
- ◆ その後の国内での稲作の伝播・普及は
  - ✓ 必ずしも菜畑・板付を起点としたものではない。
  - ✓ それは、九州北岸西端、有明海に接した筑後川流域、遠賀川上流、周防灘沿岸に見られる弥生時代の古代米は粒形がやや長粒であり、北岸域の短粒米のものとは、明らかに異なるからである。





水田稲作の渡来時期は２度 ： その各々の特徴

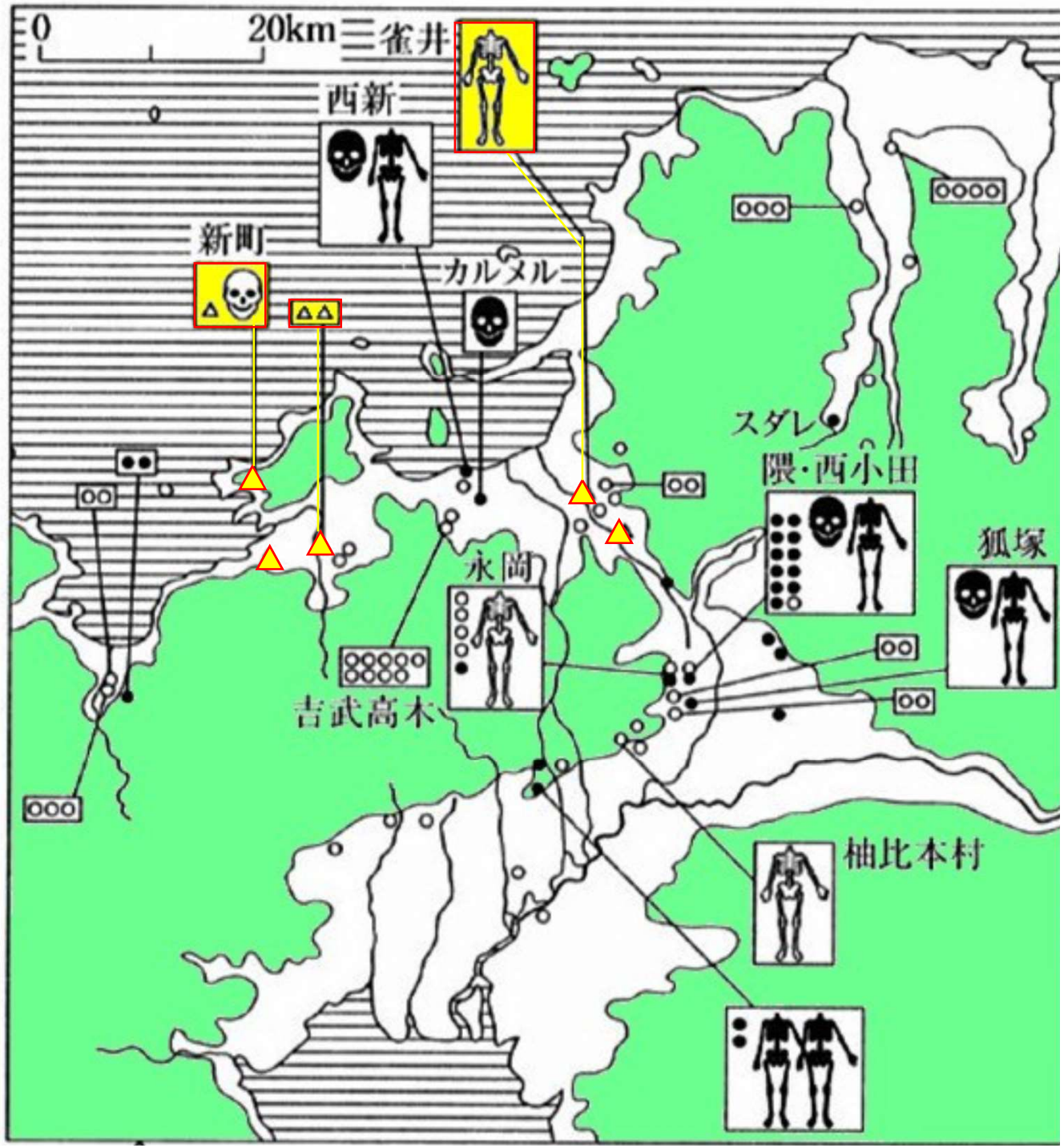
	1次渡来民（最初期水田耕作民）		2次渡来民：倭人
主要遺跡	唐津・菜畑/糸島・曲り田/博多・雀居・板付		須川・吉野ヶ里・安永田・立石
土器	韓半島の松菊里・固城遺跡で出土する無紋土器 夜臼式土器		遠賀川式土器（弥生式土器） （板付式）
集落 水田 耕作地	環濠集落も一部に見られる。 中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。 不安定な稲作を補完するために、海洋性食料を獲っていた。 **海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。**		環濠（壕）住宅も見られる。 山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する **高度な灌漑技術**を駆使した水田（水を抜くと乾田になる） 現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。 海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。
イネの 品種	極短小米： 韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で 長江下流域（春秋呉の支配地）の松澤・銭山漾遺跡 の品種と同一		**極短小米は消滅。** **やや長い小粒米**が全国に展開韓半島には同一品種のイネはない 山東半島付け根の地域の焦庄遺跡〔徐福村に近い〕と同一品種
住居	**松菊里型住宅**（方形又は円形）と 従来型の**竪穴住宅**との併用 集落により比率は違う		**高床式住宅** 寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅 （この住宅を誤って竪穴住居として復元している）
墓制	碁盤式支石墓 ： 支石の下には土壙又は木棺 韓半島南部に多い方式 ／ 中国浙江省にも源流が見られる方式		**甕棺墓**が特徴的 支石墓の下に甕棺を置くことがある 木棺墓・石棺など
武器	青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり		青銅製剣・矛・戈 鉄剣・矛 銅鏃 連弩
人種	支石墓に眠る人骨は、**低顔・低身長**の 縄文人の特徴を持つ 渡来した民族は、韓半島に逃避していた中国難民（**春秋の呉の末裔**） 人数は数百人規模以内？	韓半島に渡来していた春秋呉の難民を、 縄文人の海洋の民が、 難民と水田稲作の技術を招聘して、 北九州に 殖民したもの。 主体は**縄文人の海洋民**	**高身長・長頭・ショベル型前歯** （上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ） 中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似 韓半島人にやや類似

戦争は弥生時代
から始まった。

初期の戦争遺跡

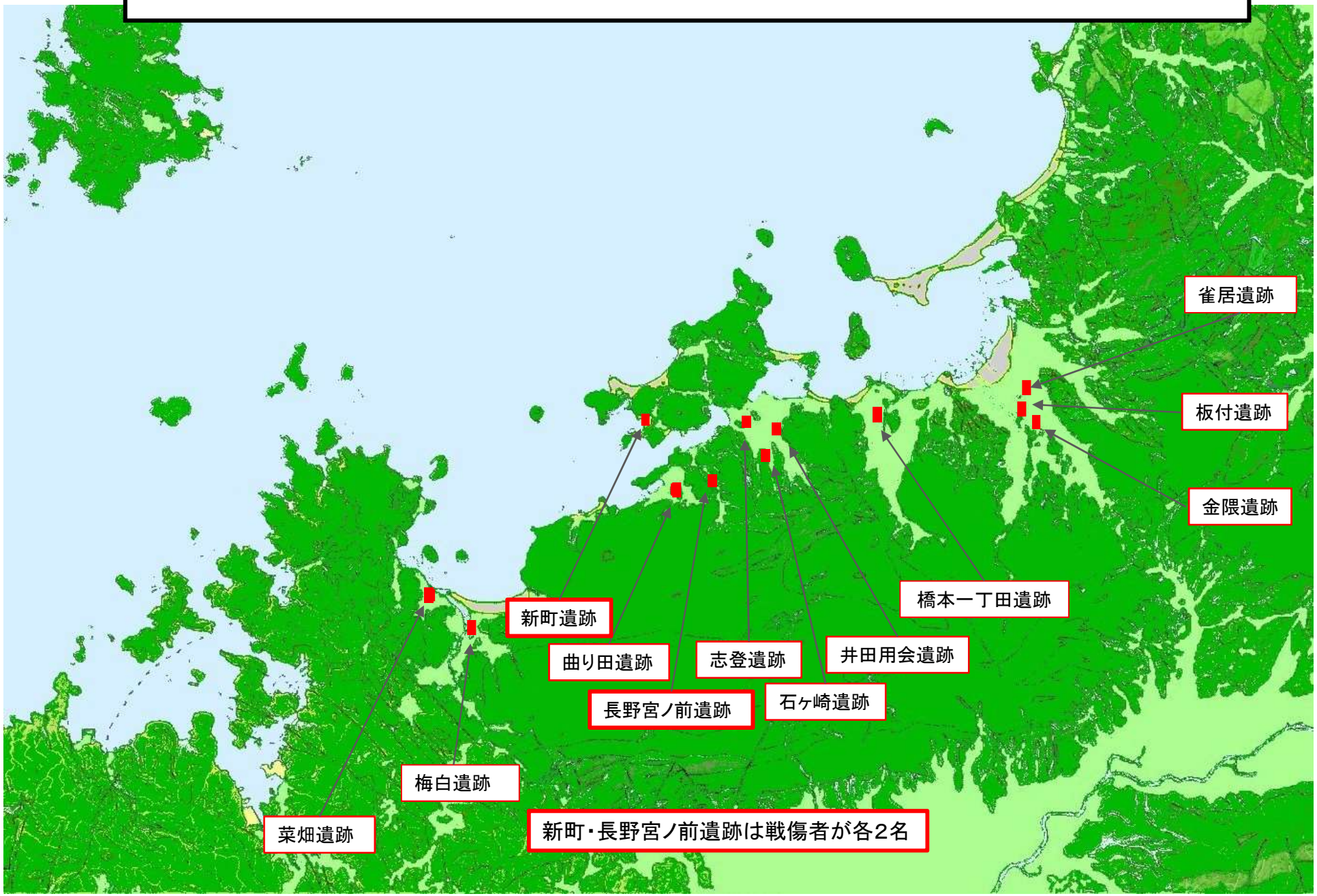
△ ： 縄文晩期末～
弥生前期前半

- 縄文時代は戦争が無かった。
- 弥生式（遠賀川式）土器を持つ渡来民が日本全国に拡散した頃に、戦争が始まった。
- 遺骨の出土は
  - 支石墓
  - 初期型の甕棺

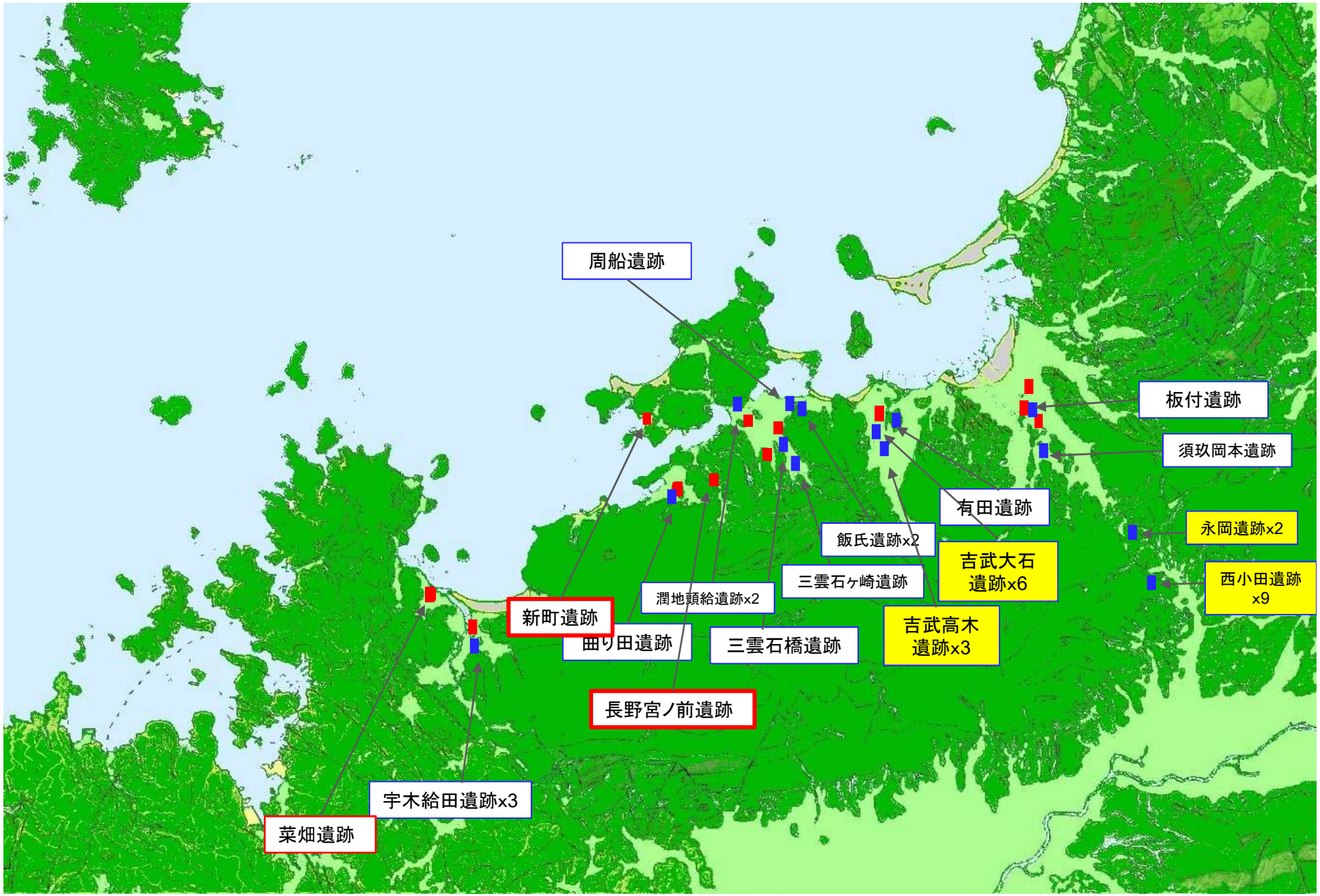


1次渡来民の初期水田・支石墓　と　2次渡来民の甕棺内の戦傷遺跡

（橋口達也「弥生時代の戦い」中ＫⅠ・Ⅱ：早期を参照）



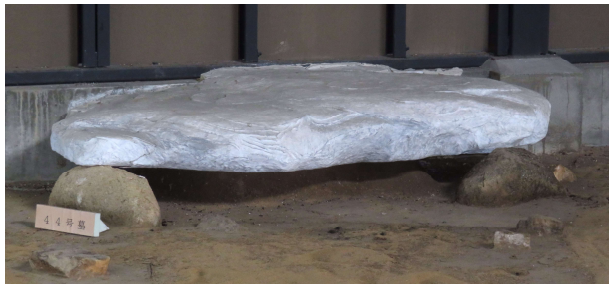
一次渡来民とその水田稲作の集落は、2次渡来民に報復襲撃を受け、集落の主が置き換わった

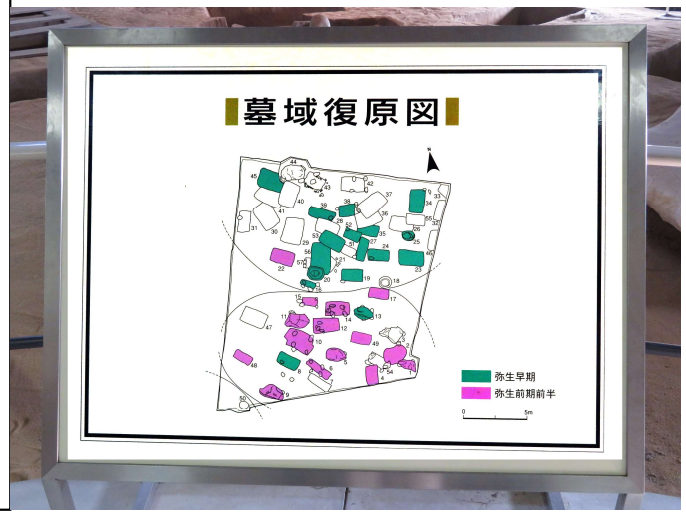


先住渡来民の居た新町遺跡では

- １次渡来民側の遺跡の付近の殆どには、
  - ２次渡来民側の勝利した戦傷遺跡が存在した。
- 新町遺跡では、２次渡来民の勝利した戦傷遺跡が、近くに存在しない
  - 墓域は、　・ 支石墓の下に甕棺が埋葬され、
    - ２次渡来民の墓が侵入し、
    - 空いた墓域は、２次渡来民用になって居た。
  - どう解釈する！
    - １次渡来民側が、２次渡来民の集落を襲い、
      - １次渡来民側が勝利
        →支石墓に眠る戦傷遺骨（縄文系）
    - ２次側が、体制を立て直し、全面戦争を行い、
      - 全ての１次側渡来民の集落を襲い、
      - 占拠した
      - 戦争で殺されたのは、壮年の男で、
        - その外の住民は、死ななかったものとみる。
    - 先住・旧渡来民の村は、水田・耕作地を含め
      2次渡来民の村となった。

✓ *２次渡来民側の勝利した戦傷遺跡が無い場合も、先住渡来民の集落は、戦争に会ったものとみられる。*





早良平野の弥生遺跡分布

糸島 平原地域（三雲南小路 鑓溝 井原 平原遺跡）

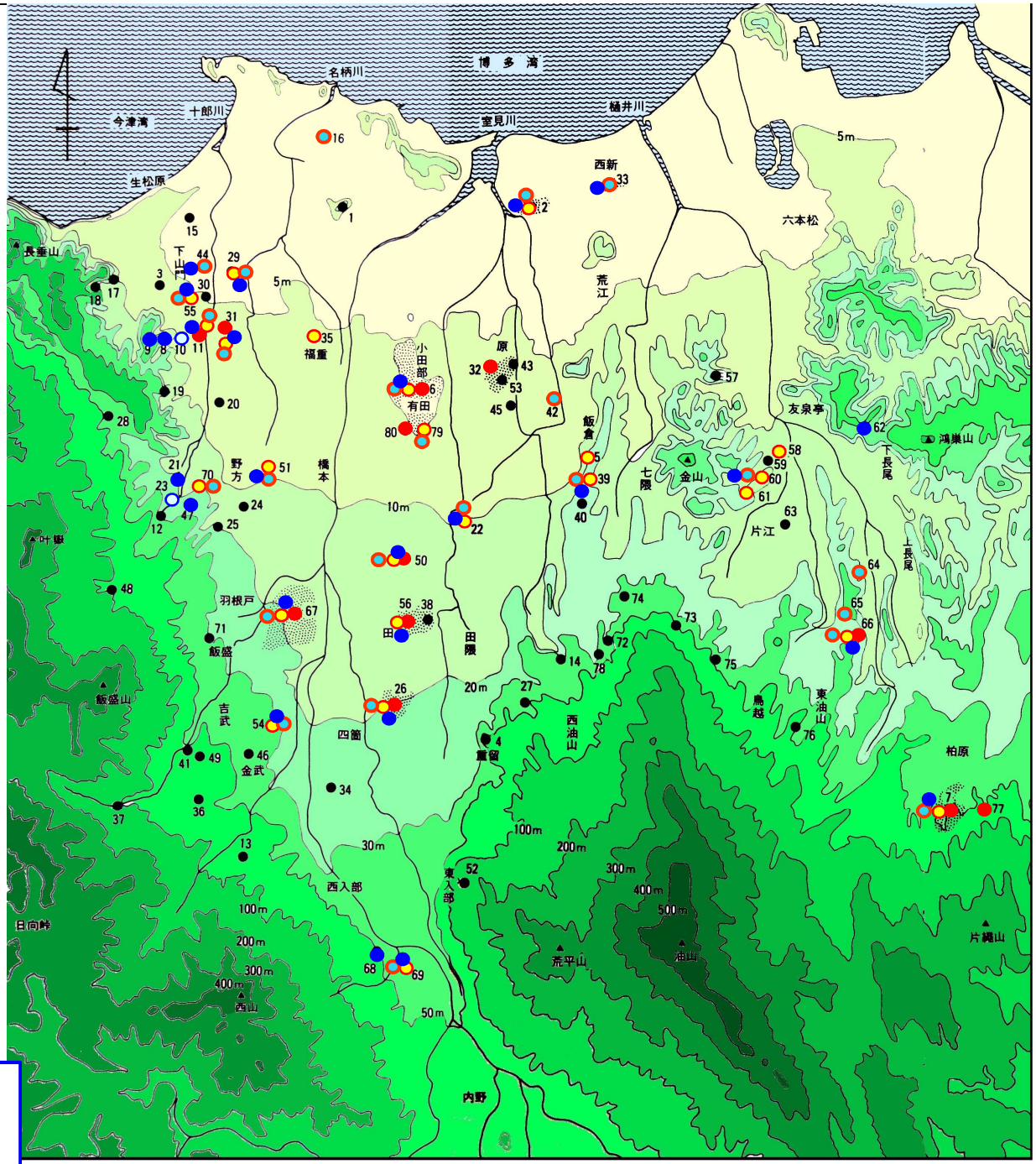


図1 早良平野の主な遺跡

福岡平野（須玖岡本遺跡）

●：先土器・縄文
○：弥生前期
○：弥生中期
●：弥生後期
○：弥生終末期
●：古墳以降

特設展図録
「早良王墓とその時代」
福岡市立歴史史料館
の図に着色

弥生初期の土器変遷図

第47回　埋蔵文化財研究集会

弥生文化の成立

ー各地域における弥生文化成立期の具体像ー　発表要旨集

2000年2月11･12日高知城ホール

北部九州における弥生文化の成立

福岡市教育委員会菅波正人氏の図より

➢　北九州では、

- 1次渡来民が使用した夜臼I式･夜臼IIa式･夜臼式IIb式は、ある段階から、
  - 同時期に、
  - 全ての場所で、

  2次渡来民の遠賀川式土器(板付式)に置き換わるか、消滅した。
- 両方式が並存する時期があることから、この変換期には、
  - **全員抹殺ではなく、**
  - **多くの住民(特に土器を製作した女性達)は、生き延びたもの**

  と推察する。

突帯文土器～遠賀川式（系）土器の遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	板付遺跡G－7a･b調査区下層	板付遺跡G－7a･b調査区中層	板付遺跡G－7a･b調査区上層	雀居遺跡5次 SK188他	比恵遺跡30次 SU007他	比恵遺跡30次 SU012他	備考
1	菜畑遺跡	●	●	●＋○	○	○		水田跡、大陸系磨製石器
2	石崎曲り田遺跡	●						集落、大陸系磨製石器
3	有田七田前遺跡	●	●					大陸系磨製石器
4	有田遺跡		●	●＋○	○＋◎	○	○＋亀の甲タイプ	環濠集落、松菊里型住居、大陸系磨製石器
5	橋本一丁田遺跡	●	●	●＋○	○＋◎			大陸系磨製石器
6	石丸古川遺跡		●	●＋○				大陸系磨製石器
7	重留遺跡				○＋◎	○	○＋亀の甲タイプ	松菊里型住居
8	板付遺跡	●	●	●＋○	○＋◎極少	○	○＋亀の甲タイプ	環濠集落、松菊里型住居、大陸系磨製石器
9	雀居遺跡	●	●	●＋○	○＋◎極少	○	○＋亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
10	那珂遺跡		●	●＋○	○＋◎極少	○	○＋亀の甲タイプ	環濠集落、大陸系磨製石器
11	比恵遺跡		●	●＋○	○＋◎極少	○	○＋亀の甲タイプ	松菊里型住居、大陸系磨製石器
12	雑餉隈遺跡				○	○	○＋亀の甲タイプ	大陸系磨製石器
13	江辻遺跡	●	●	●＋○				松菊里型住居、大陸系磨製石器
14	今川遺跡			●＋○	○	○		環濠集落、松菊里型住居、大陸系磨製石器
15	前田遺跡				○	○		方形プラン竪穴住居跡、大陸系磨製石器
16	大木遺跡			●				松菊里型住居、大陸系磨製石器
既往の編年･型式･様式		夜臼Ｉ式	夜臼IIa式	夜臼IIb式＋板付Ｉ式	板付IIa式(古)	板付IIa式(新)	板付IIb式	

●は晩期（早期）の突帯文土器　○は遠賀川式（系）土器　◎は弥生土器化した突帯文系土器

1次・2次の弥生渡来民のまとめ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">1次渡来民</th><th>2次渡来民</th></tr>
<tr><td>渡来時期</td><td colspan="2">春秋呉の滅亡BC473年より後　→　BC400年付近か？</td><td>BC219年とBC210年</td></tr>
<tr><td rowspan="3">人種</td><td rowspan="2">渡来した民族は、韓半島に逃避していた中国難民（春秋の呉の末裔）
人数は数百人規模以内？
その人々に日本への渡来を勧め、連れてきたのは、縄文人の海の民。</td><td rowspan="3">韓半島に渡来していた春秋呉の難民を、縄文人の海洋の民が、難民と水田稲作の技術を招聘して、北九州に殖民したもの。
主体は縄文人</td><td>秦始皇帝の時代に出奔した徐福一行：倭人
1万～数万人規模で渡来</td></tr>
<tr><td>高身長・長頭・ショベル型前歯
（上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ）
中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似
韓半島人にやや類似</td></tr>
<tr><td>支石墓に眠る人骨は、低顔・低身長の縄文人の特徴を持つ</td></tr>
<tr><td>墓制</td><td colspan="2">碁盤式支石墓　：　支石の下には土壙又は木棺
韓半島南部に多い方式　/　中国浙江省にも源流が見られる方式</td><td>甕棺墓が特徴的　支石墓の下に甕棺を置くことがある
木棺墓・石棺など</td></tr>
<tr><td>住居</td><td colspan="2">従来型の竪穴住宅と、
松菊里型住宅（方形又は円形）との併用
集落により比率は違う</td><td>高床式住宅
寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅
（この住宅を誤って竪穴住居として復元している）</td></tr>
<tr><td>集落

水田
耕作地</td><td colspan="2">環濠集落も一部に見られる。
中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。
不安定な稲作を補完するために、海洋性食料を獲っていた。
海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。</td><td>環濠（壕）住宅も見られる。
山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する高度な灌漑技術を駆使した　水田（水を抜くと乾田になる）
現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。
海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。</td></tr>
<tr><td>イネの
品種</td><td colspan="2">極短小米：　韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で
長江下流域（春秋呉の支配地）の松澤・銭山漾遺跡の品種と同一</td><td>極短小米は無くなり、やや長い小粒米が全国に展開
韓半島には同一品種のイネはない
山東半島付け根の地域の焦庄遺跡〔徐福村に近い〕と同一品種</td></tr>
<tr><td>土器</td><td colspan="2">韓半島の松菊里・固城遺跡で出土する無紋土器
夜臼式土器</td><td>遠賀川式土器（弥生式土器）
（板付式）</td></tr>
<tr><td>武器</td><td colspan="2">青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり</td><td>青銅製剣・矛・戈　鉄剣・矛　銅鏃　連弩</td></tr>
</table>

中国の民族と言語 ①

- 国民の92%を占める漢民族(漢族)と「少数民族」の分けられる。
  - 「少数民族」は56民族が認定され、その言語も尊重されている。
  - その一方で、既に3000の言語が消滅し、今も、300の言語が消滅の危機に瀕していると云う。
- アチャン族(阿昌族) ・ イ族(彝族)
- ウイグル族(維吾爾族) ・ ウズベク族(烏孜別克族)
- エヴェンキ族(鄂温克族、オウンク族)
- オロチョン族(鄂倫春族) ・ 回族(ホウェイ族、フェイ族)
- カザフ族(哈薩克族、ハザク族)
- キルギス族(柯?克孜族、クルグズ族) ・ 高山族
- コーラオ族(仡佬族) ・ サラール族(撒拉族)
- ジーヌオ族(基諾族) ・ シェ族(畲族)
- シベ族(錫伯族、シベ族) ・ ジン族(京族、越族、ベトナム族)
- スイ族(水族) ・ タジク族(塔吉克族)
- タタール族(塔塔爾族) ・ タイ族(傣族、ダイ族)
- ダウール族(達斡爾族) ・ チベット族(蔵族)
- チャン族(羌族) ・ 朝鮮族 ・ チワン族(壮族)
- チンプオ族(景頗族) ・ トゥ族(土族)
- トゥチャ族(土家族) ・ トーアン族(德昂族、旧称パラウン族)
- トーロン族(独龍族) ・ ドンシャン族(東鄉族)
- トン族(侗族) ・ ナシ族(納西族) ・ ヌー族(怒族)
- ハニ族(哈尼族) ・ バオアン族(保安族)
- プーラン族(布朗族) ・ プイ族(布依族) ・ プミ族(普米族)
- ペー族 (白族) ・ ホジェン族(赫哲族、ホーチョ族)
- マオナン族(毛南族) ・ 満州族(満族) ・ ミャオ族(苗族)
- ムーラオ族(仫佬族) ・ メンパ族(門巴族) ・モンゴル族(蒙古
- ヤオ族(瑶族) ・ ユグル族(裕固族) ・ ラフ族(拉?族)
- リー族(黎族) ・ リス族(傈僳族) ・ローバ族(珞巴族)
- オロス族(俄羅斯族、ロシア族) ・ワ族(佤族)

中国の民族と言語　②　中国語

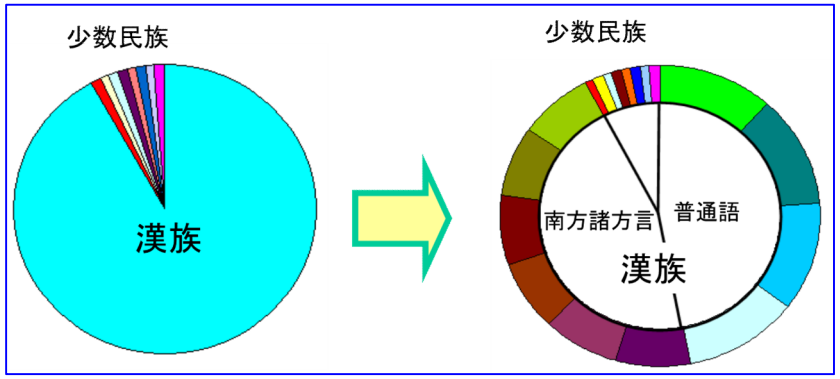
- 漢語圏とされる言語は、北方の「北京官話」と南方の「南方中国語諸方言」に大別される
  - 南方中国語諸方言は6種類の言語
    - ①上海語・・・江蘇省南の一部と浙江省
    - ②福建語・・・台湾、福建省、海南島と広東省の東の一部
    - ③広東語・・・広東省西部、北部の一部を除く江西省
    - ④客家語・・・江西省と広東、福建省の境界地帯、他に福建省外に散在する
    - ⑤贛方言・・・江西省と湖北省の南東部の一部
    - ⑥湘方言・・・北西の一部を除く湖南省
  - 北京官話の分布　←（普通話）
    - ①北方官話・・・東北部すなわち旧満洲と北方（黒龍江、吉林、遼寧、河北）
    - ②西北官話・・・黄土台地とその西方地域（甘粛、寧夏、陝西、河南、湖北、）
    - ③西南官話・・・四川とその近隣地域（四川東部、貴州東部、雲南）
    - ④東方官話・・・南京とその周辺（江蘇、安徽、山東）
- **漢語と言っても、各地域の発音は、全く違い、 同一言語ではない。**

	①北京語（普通話）	②上海語	③広東語
・漢字表記	我是日本人	我是日本人	我係日本人
・ローマ字表記	Wo shi Ribenren.	Gno zhi Zhakbnnin.	Ngoh haih Yahtbunyahn.

✓ 漢族と総称しているが、実は漢族などという民族は存在せず、それぞれの言語に対応した民族に分かれていると考えられている。

⇧

✓ 異民族でも漢族の文化伝統を受け入れれば、漢族とみなされて来た。



中国の民族と言語 ③

- **中国歴代の王朝は、連綿と続いて来たが、その言語は、連綿と続いてきたのか？**
  - **答えは、「否」**
  - **連綿と続いてきたのは、漢字・漢文。**
    - 「夏」の文字は未発見、「殷・商」甲骨・金文文字、周以降続く、秦の時代に中国全土で、文字・度量衡などの統一を図る。夏の時代は不明だが、それ以降、漢字の始まりとなった文字が連綿と使われ、秦の始皇帝の統一運動により、統一の拍車がかかり、漢の時代に完成。それ以降も、外部の民族が中国を征服した後も、漢字・漢文が連綿と使用された。
- 統一を図った各王朝は、中原の民族が全てではない。
  - 従って、言語は、各時代ごとに、違う言語が話されたものと考えるのが妥当。
  - 夏も、殷も中国の中原の出身ではない、東夷人と言われ、話した言語は違ったと見られるが、証拠はない。
  - 書き言葉は、漢字・漢文の原型が、継続して使われて来た。
    - ✓ これが、中華民族が、連綿と続いて来たとの幻想を人に抱かせてきた要因。

- **漢民族**
  - 漢朝（前漢・後漢）では最盛期には、人口が6000万人を数えたが、黄巾の乱や三国鼎立の時代など後漢末からの社会的混乱や天候不順のため、中原の戸籍に登録されている者は500万人を切った。
  - 漢朝の漢民族は1/10以下に激減し、僻地に追いやられ、或いは「客家」となり、中原からは失われた。

- 倭人・倭語
  - 歴史上、中国では、多様な（3000以上）言語が存在したが、その大多数は消滅した。
  - 倭語も、その消滅した言語のひとつと見られる。 中国に倭人・倭語が存在した可能性はある。
  - 倭人が中国内で長い歴史をもっていたならば、漢字文化をもっていたはず。
    - 話し言葉は 倭語・日本語　　書き言葉は 漢字・漢文　⇦ これが日本語の本質

倭人・日本人の Y-DNA

- Y-DNAに関しては、 世界中で、ほぼ日本人だけに見られる型のDNAが3系統ある
  - D2 ： アイヌ人の 85%、 日本人全体の 40%は、----------日本人だけ （縄文人のDNA）
  - O2b1： アイヌ人の 0%、 日本人全体の 26%は、---------- ほぼ日本人だけ → 弥生人
  - C1 ： 沖縄人の 4% 日本人全体の 2%は、---------- 日本人だけ
  - O3： アイヌ人の 0%、 日本人全体の 16%は、---------- 漢民族に多い
  - ✓ 民族を特定する特徴的なDNAは、男だけに伝わるY遺伝子。
- **O2b1**は、弥生系：倭人に特有の遺伝子。
  - ✓中国人のY-DNAの調査結果では、O2b1は0%。

（2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹（ver.11.20）による）

旧名称	主な地域	系統名称	ハプログループ	
C1	日本列島	C1a1	C-M8	
C3	シベリヤ北部	C2	C-M217	
D1	チベット	D1a	D-Z27276	
D2	日本列島	D1b	D-M55	
O1	中国南部	O1a	O-M119	
O2a	東南アジア	O1b1a1a	O-M95	
O2b	朝鮮半島	O1b2	O-M176	O-L682
O2b1	日本列島	O-47z	O-M176	O1b2a1-47z
O3	漢族北方	O2	O-M122	

2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹（ver.11.20）による

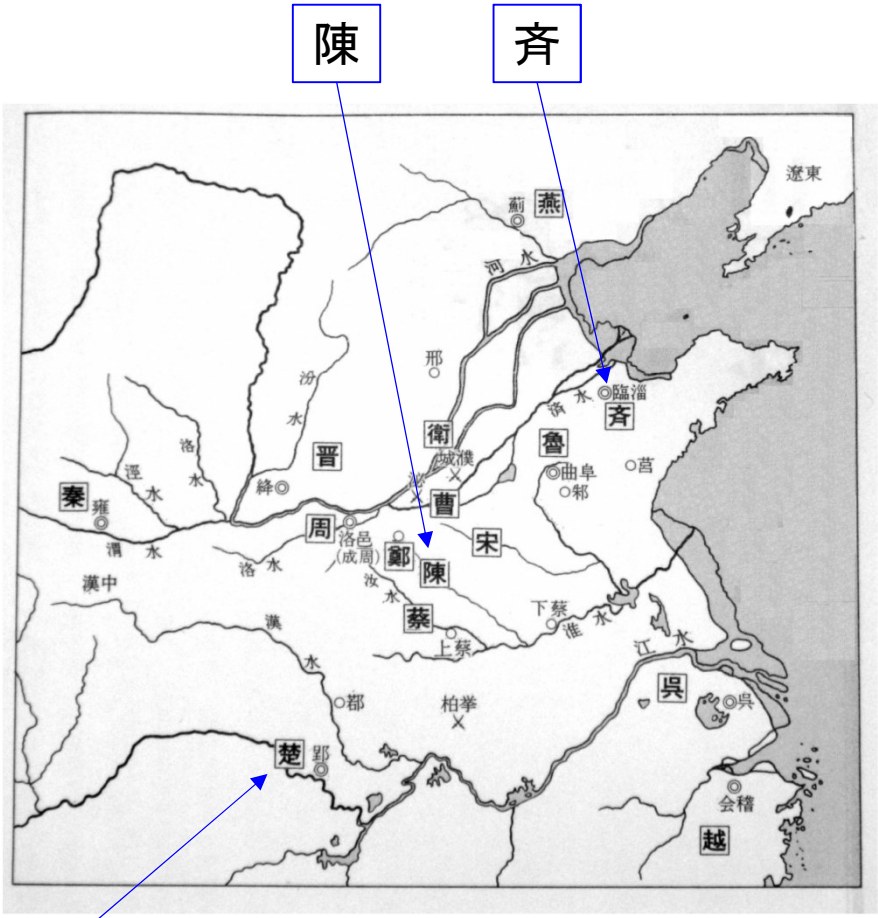
- 「中堀豊著、Y染色体からみた日本人から」
  - 日本人の30%（上記の数値とは相違）と韓国人の10%に見つかる「Y2」といわれる型は、その他の地域では発見できないが台湾で65人中8人で見つかった。その8人の内3人は名前を「陳」という。この「陳」と言う家系は、黄河の南の地域に起源を持つという。 （Y2は、DNA解析初期の古い呼称で、O2bとO2b1を含む名称）
    - **歴史を辿れる家族名を持つ「陳」一族と日本人の関係を説明できる起源論が望まれる。**
      - 日本人に多いO2b1は、韓国・朝鮮には少ない。 → 韓国・朝鮮人は、近接種ではあるが別種。
      - 韓国・朝鮮人に多いO2bは、日本人の8%を占め、流入があったことを示している。
- 倭人に特有の遺伝子が判明し、中国本土に「陳」と云う一族がおり、その遺伝子を持っていたことが判明した。 貴重な情報。
  - 中込豊氏（中堀氏の先生）の記述では、陳氏は祖先は河南省に居て、戦乱を逃れ、広州・浙江省に行き、更に台湾に渡ったとしている。
  - この氏名の判る一族のことが判ると、倭人を辿る助けになる。

「陳」一族

- 河南省の陳一族の話
- 「陳」は、中国の王朝名、地方名。地方としての陳は現在の河南省淮陽県を中心とした一帯。
  - 陳（春秋）- 周の武王により、帝舜の末裔が封じられた国。
- 紀元前672年に陳（嬀姓）の利公嬀躍（きやく）の子：公子完が、斉へ亡命。「陳」から変えて田氏を名乗った。
  - 田氏は、斉では代々、呂尚（太公望）の子孫である斉公に仕えた。
- 紀元前478年に「陳」は、楚の恵王によって滅ぼされた。

- 前391年、斉の最後の君主は、田氏により追放された。
  - 前386年、田氏の和は、周の安王により諸侯に列され、斉の王となった。 これが田斉と云われる。
  - 春秋戦国の時代に斉は、秦・楚・斉・燕・趙・魏・韓の七雄に数えられた有力な国となった。
- 前221年に最後まで残った斉が、秦の始皇帝の武力侵攻を受けて滅んだ。（殲滅・全滅と云うほどの悲劇は起きなかったと伝わる。）

- 戦乱を逃れ、広州・浙江省へ行き**台湾に渡った**「陳」一族は、楚に滅ぼされた本家の「陳」の可能性がある。
- 田斉の一族は、どうなったのだろうか？



楚

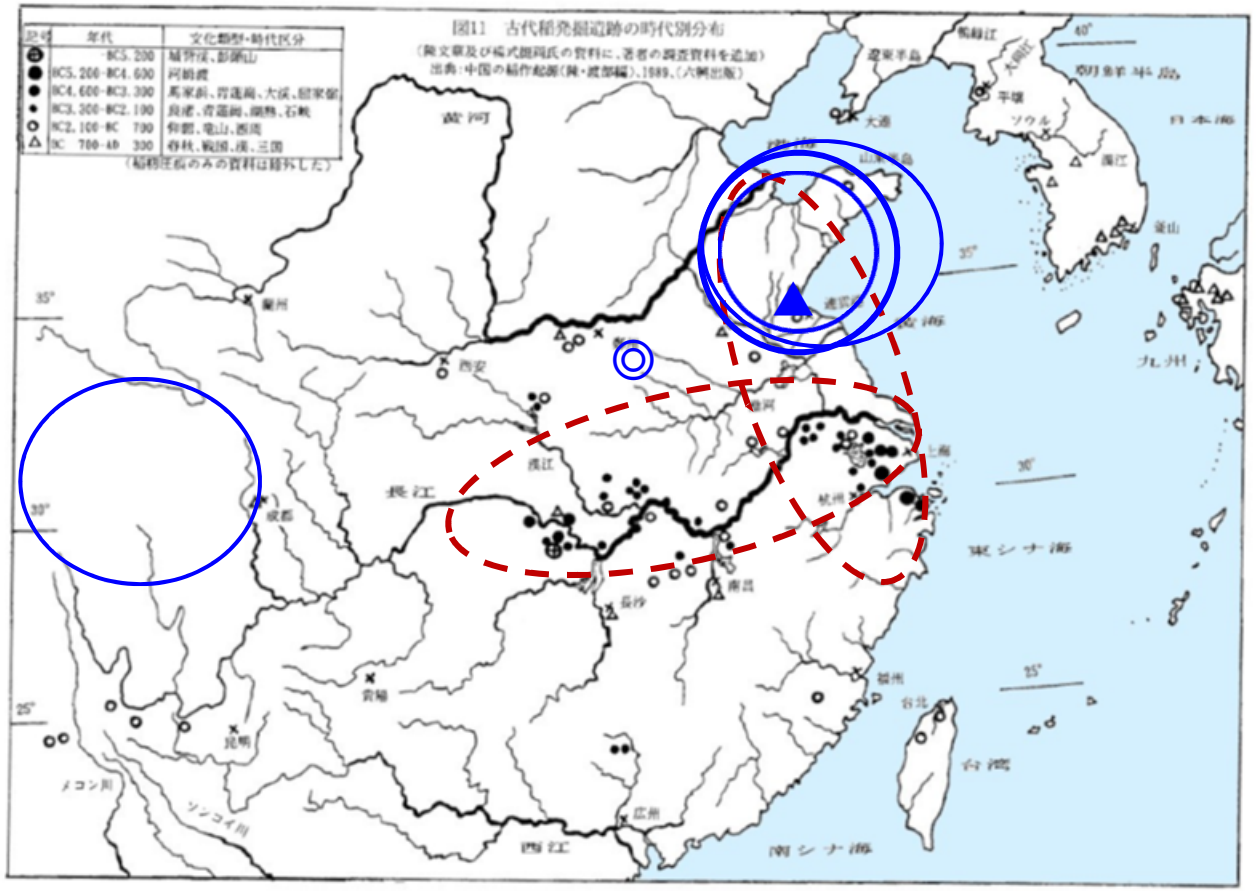
徳間書房刊
司馬遷　史記「I」 覇者の条件
市川宏・杉本達夫訳
春秋時代の中国　の図より

倭人の渡来元はどこか？

- 倭人の渡来元をたどる要素からまとめると、その可能性のある場所は、以下の地域となる。
  1. 同一の体形＝骨格をした民族は何処にいたか？　臨淄等山東半島　青海省
  2. 甕棺の墓制を持つ民族は何処にいたか？　長江流域　黄海・東シナ海沿岸
  3. 日本で栽培された米と同じ品種の米は何処で栽培されていたのか？　焦庄遺跡 ▲
  4. 倭語＝日本語を話す民族は存在しえたのか？　特定でき無い　多言語国家でどこかに居た可能性有
  5. 同一の遺伝子を持った民族は何処にいたのか？　河南省「陳」 ◎　斉 ◎

- 倭人の渡来元の候補地は絞られて来た。

- では、徐福の居た場所は何処か？
  中国の文献と遺跡から見てゆきたい。



徐福村発見の初報　1984年4月18日

1984.4.18 光明日报 ·3·

秦代东渡日本的徐福故址之发现和考证

罗其湘　汪承恭

一九八二年六月，在江苏赣榆县地名普查的原始资料中，有一个原名徐福，后演变为“徐阜”的自然村，引起我们的注意。资料中还介绍了该村及其附近居民世代相传秦始皇派遣著名方士徐福东渡蓬莱（现日本）求仙采不老药的故事。这是迄今在我国首次发现的徐福的历史遗迹。

江苏赣榆县徐阜村是徐福的故乡

徐福，亦名徐市，秦始皇时齐地琅琊人。我国古籍最早记载徐福事，当推司马迁的《史记》。《史记》中的《秦始皇本纪》、《淮南衡山列传》等，均有明确记载。之后，中日两国史书和方志转述记载不绝。《三国志·吴志》、《后汉书·东夷列传》、《隋书·倭国传》、《北史·东夷传》以及《三齐记》、《太平寰宇记》、《括地志》、《山东通志》、《青州府志》等，均有记述。日本记述徐福事的文献书籍更多，如《神皇正统志》、《罗文山集》、《异称日本传》、《同文通考》、《续风土记》、《和歌山县史迹名胜志》、《日本名胜记》等。另外，日本还有不少研究徐福的专著，如《徐福》、《徐福东来传说考》、《徐福在日本生活传说》等。至今，日本近畿和九州等地，尚保留有许多追念徐福的纪念地（包括墓地）。然而，长期以来，在我国历史上是否确有徐福其人其事，许多学者是持否定态度的，只是把它当作一种“民间传说”。考其原因，不外乎认为史籍记载不详，内容简略，况且还蒙上一层“神仙思想”的迷雾，因而怀疑是历史上的虚构。

徐福村，位于江苏赣榆县城北金山乡南一公里，现已演变为徐阜村。该村由南北两自然村组成。南为前徐阜，北为后徐阜。后徐阜村，即原徐福村故址。故址附近，还有后人因徐福东渡未归而修建的一座怀念徐福的徐福庙。相传到宋熙宁三年（一〇七〇年）改建，名为兴会（国）寺。后又演变为牛王庙、关帝庙等，借已圮。徐福村现已无徐姓居民。据说是因为徐福东渡后，怕采药不成，处以抄家灭门之罪，徐姓遂改为韦、王、刘等姓氏。就这样，徐福村以后就没有姓徐的居民了。

徐福出生于秦统一前的中国，经历了从战国到秦两个时代。徐福籍贯何处？按《史记》，徐福是齐琅琊人。那么秦以前赣榆是否属齐地，秦以后是否属琅琊郡？关于这个问题，郦沫若主编的《中国史稿地图集》和谭其骧主编的《中国历史地图集》中，给了我们明确的解答：战国时赣榆属齐地，秦时属琅琊郡。这样徐福故乡是赣榆，和《史记》所载徐福是齐人，琅琊人，就完全吻合了。赣榆县的历史建制是秦置还是汉置？过去根据《汉书·地理志》所载认发达的地区。

我国历代方志和民间家谱，始于宋，盛于明清。有徐福村记载的有：

“关帝庙在治东，雍正十二年……置建。又一（王成：嘉庆元年《赣榆县志》）。

“崇又乡十三图，在治北十三图。旧分属宋（社、徐福社、获水口社，今省”（唐仲冕：嘉庆十二直隶州志·建置考》）。

“关帝庙在治东，在徐福村。”（王玉熙：光《赣榆县志》）。

徐福村现在各姓居民保存的家谱不多。计有：（续修的《张氏宗谱》；乾隆四十二年修的《王氏谱》十九年续修的《壹经堂·后徐福·韦氏支谱》和民（续修的《壹经堂·韦氏支谱》等。这些家谱中，留村”、“后徐福”、“徐福社”、“徐福河”等有关（余处。如《张氏家谱·序》云：“我族自明初渡海（赣邑，有住止于白兔庄（在徐福村东北）者，有栖（者。”“明时由东来。始祖张大公住后徐福村。”（续性特点，明初之有徐福村，决不意味着徐福村名（是意味着徐福村的由来始于更早的历史年代，由（续记载、承袭下来的。因此，现在徐福村各姓居民（同版本的家谱，是考证徐福村的一项极为重要的依（

徐福东渡日本是秦始皇东巡产生的结果

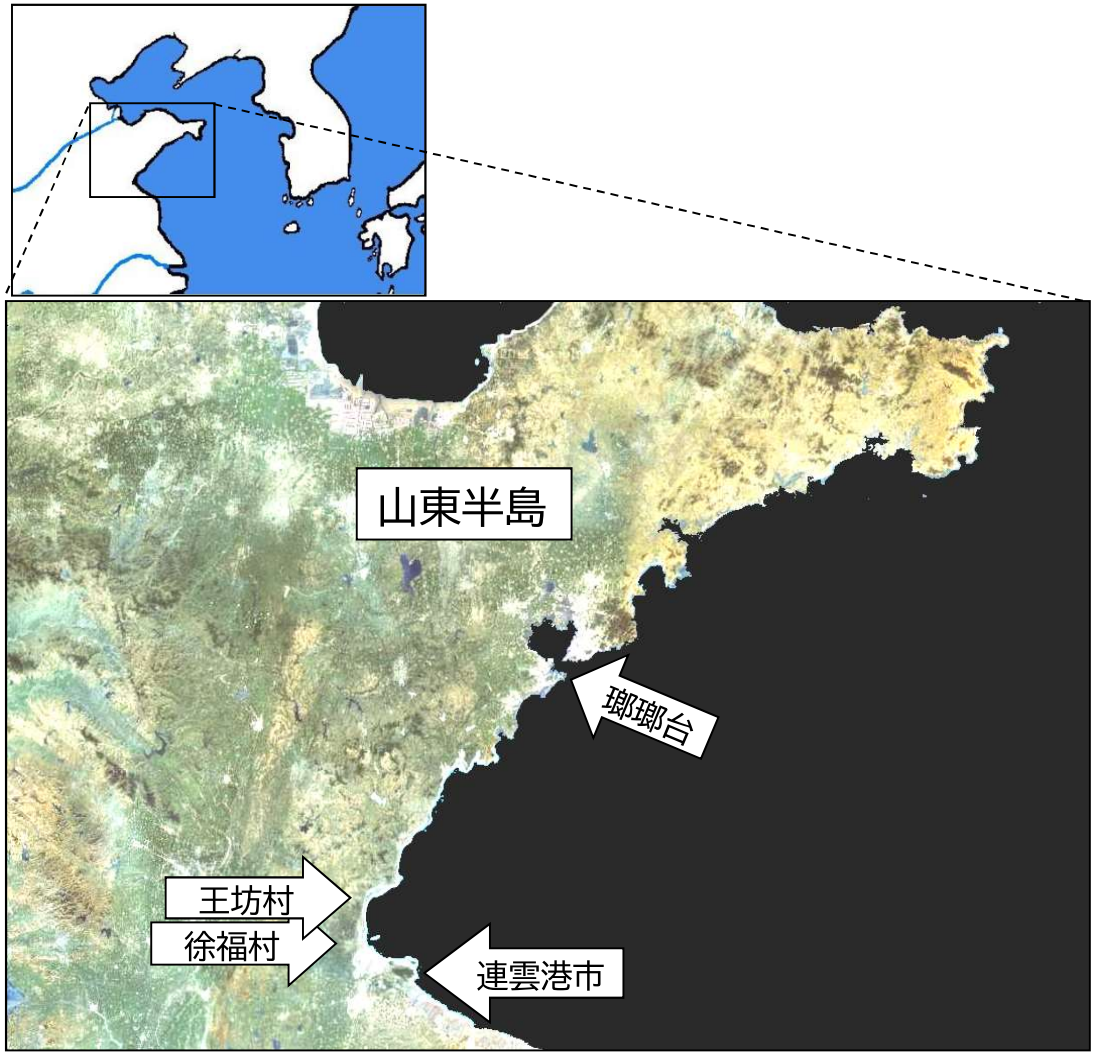
秦统一中国后不久，秦始皇即“铭功会稽岭，（台。”五次出巡全国。其中三次到琅琊，两次行经（琅琊郡的沿海地带，是海岛集中、方士会集的地方。（上，琅琊郡治位于海州湾东北部，赣榆县位于海州湾（处相隔不远，且有海路和陆路相通。这一点就为秦（徐福等方士、徐福等方士能直接接触秦始皇，提供（理条件。

根据我们考察所得和方志所载，秦始皇两次巡（带，留下来的遗迹地名是不少的。据此，我们可以（秦始皇两度经赣榆及附近地区，巡游活动的具体路（

第一次（秦始皇二十八年，公元前二一九年）（皇一行，从胶东北部芝罘南下琅琊台。“留三月”（书。然后西南行，经日照到今赣榆下驾沟，乘船入海（岛，求仙勒石。然后又折回下驾沟，经今莒南秦王（抵东海郡郯县（今山东郯城），然后去彭城（今徐州（泗水打捞周鼎。

第二次（秦始皇三十七年，公元前二一〇年）（皇南巡经泗庭到会稽。又乘船渡长江，入邗沟运河，（阴、涟水，入游水至朐县（今连云港市海州），立（向西，折向东北，经大港头（北距徐福村约五华里）（榆柘汪口入海州湾，“并海上，北至琅琊”。徐福（他的家乡一带，又一次见到秦始皇，再次受命出海（次：“徐市等入海求神药，数岁不得，费多，恐谴，‘蓬莱药可得，然尝为大鲛鱼所苦，故不得至’”（秦始皇本纪》）。这次“始皇帝大说，遣徐男女三千五谷种种百工而行，徐福得平原广泽，止王不来，于丘相思”（《史记·淮南衡山列传》）。徐福就是这次（的。

徐福の遺跡・遺物など



☆　1982年6月**徐福村が発見**された。

・　徐福は出発に先立ち、この村に残るものに徐姓を名乗ってはならないとの伝えたので、姓を変えたと村民の子孫。

・　徐の家系図の一つが解析され、徐市(福)の存在が確認された。

・　その発表された結果、中国全土に散った徐一族の子孫から56部の家系図の存在が明らかになった。

・　徐福村からは、鉄製手工道具とおびただしい冶金用の鉄塊や、薬研やローラが発見された。

☆　徐福村の北東35km程の地に**大王坊村**がある。

・　2000年以上前の大量の造船用の良材を含む、造船所の遺跡が発掘された。

・　徐福一行の船を建造したとみなされている。

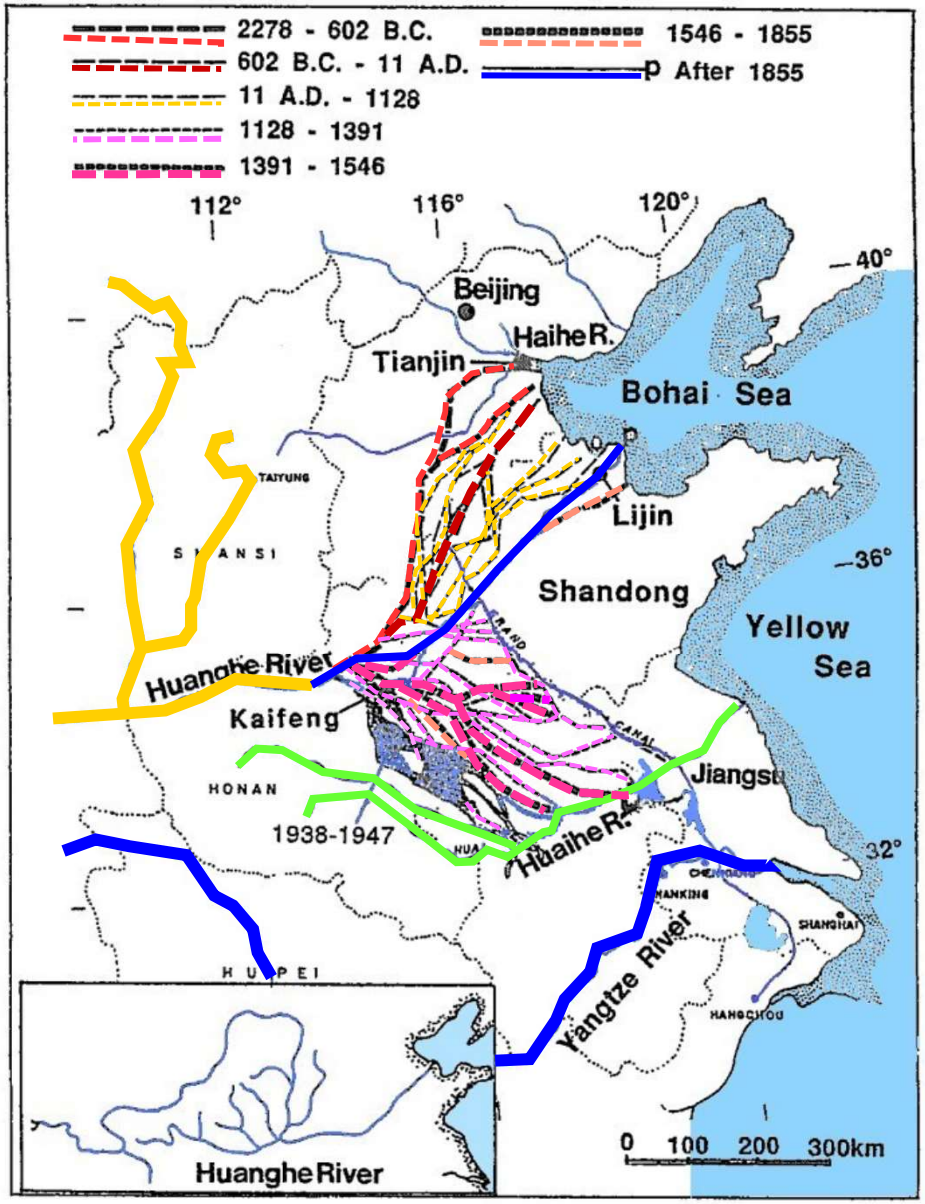
☆　連雲港市の大王坊村も徐福村も、現在は、内陸にある。

・　ボーリングの結果、この地域は、**黄河の運んだ黄土が5m堆積しているとの事。**

・　かっては、海岸に面した航海に適した場所であった。

参考文献　羅其湘・飯野孝宥共著「弥生の虹桟　徐福」
程天良著　池上正治訳「徐福　霧のかなたへ」

論文：東シナ海陸棚堆積物に記録された 黄河の河道変遷と人為的影響



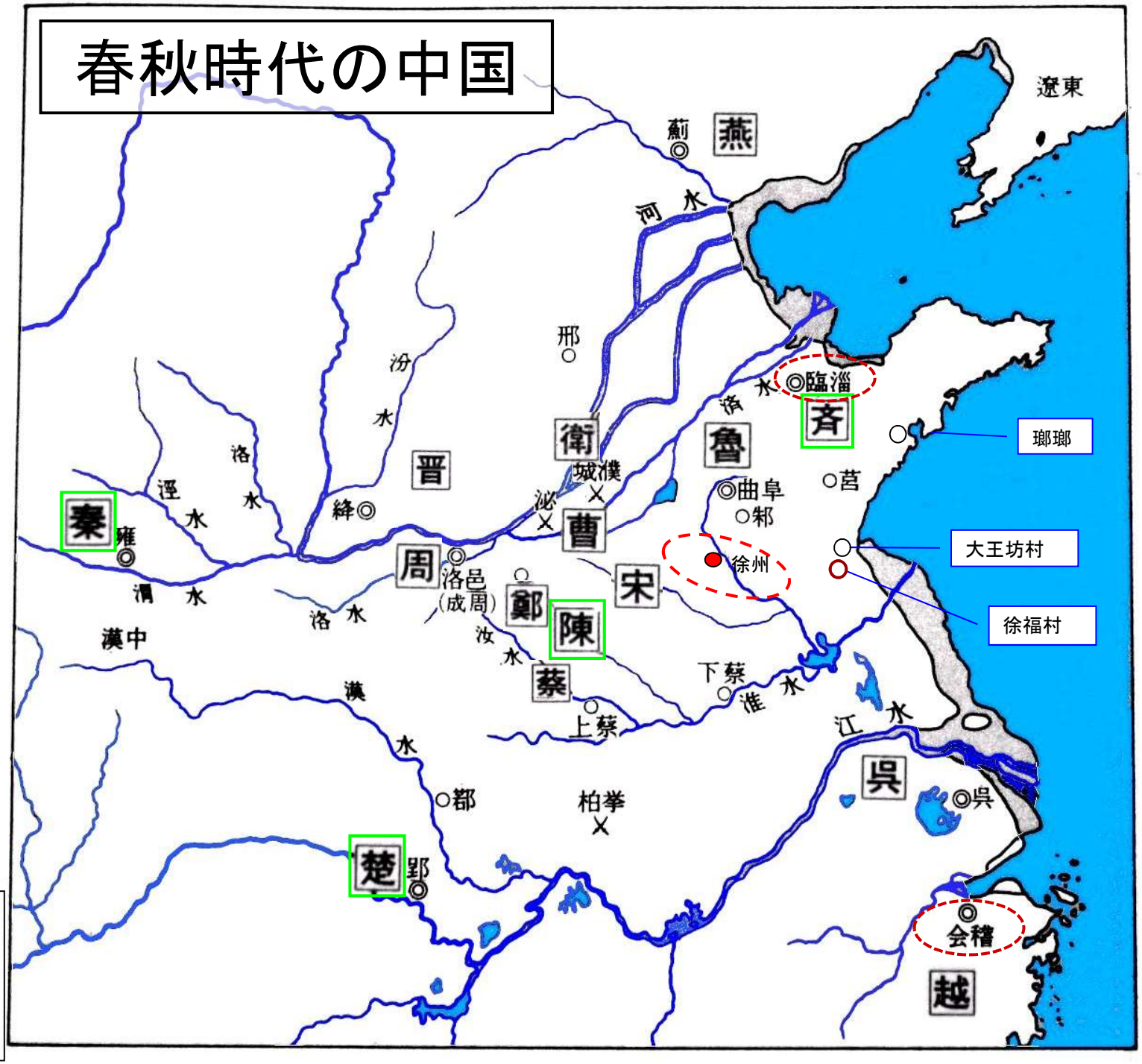
第１図　BC2278年から現在までの黄河の河道変遷図.
Shen (1979)，成(1991)，ほかをもとに作成.

・発行：1994年4月地質ニュース476号、8-16頁,
・著者：斎藤 文紀・池原研・片山茶・松本英二・楊作升

- 東シナ海の堆積物から過去4千年の黄河の流路と土砂供給量の変化を調査したレポート。
- 黄河の河口位置は、山東半島の南北と大きく変化
  - 以前　：南 → 黄海
  - BC2278年～AD1128年 ：北 → 渤海
  - AD1128年～1546年：主に南→黄海へ、一部北へ
  - AD1546年～1855年 ：北 → 渤海
  - AD1855年～現在　：北 → 渤海
- BC200年以前は、黄河は清流　堆積物小
- BC200年以降、土砂流出（農地化が原因）
- 西暦60年頃、一時、清流化。（匈奴が牧草地化）
- 西暦600年以降農地化し、堆積物大

✓ **徐福の時代には、黄河は清流　→ 渤海**
  - 山東半島南北岸は、水深も深く、海運に好条件
  - ✓ 三国志の時代は、　→ 渤海
    - 土砂堆積は少なく、海深は十分
- **徐福村・連雲港・大王坊村は、BC200年頃まで、**海運に好条件の地域。（黄砂に埋もれた現在とは違う）
  - 西暦1128年以降は急激に、黄河の堆積物で埋まり、5m以上の堆積物の下になり、徐福関連の遺跡は、人の目に触れる機会が無かった。中国でも伝説化した一因か。

神話伝説（三皇五帝）			
夏	BC2070年？～		
殷(商)	BC1600年～BC1046年		
周	西周		
	東周	春秋戦国	
秦	BC221-206年		
漢	前漢		
	新		
	後漢		
三国	魏	呉	蜀
晋	西晋		
	東晋	十六国	



徳間書房刊
司馬遷　史記I」
覇者の条件
市川宏+杉本達夫訳
春秋時代の中国の図
に色などを付加

徐福一族の先祖は 誰か！

神話伝説（三皇五帝）			
夏	BC2070年？～		
殷（商）	BC1600年～BC1046年		
周	西周		
	東周	春秋戦国	
秦	BC221-206年		
漢	前漢		
	新		
	後漢		
三国	魏	呉	蜀
晋	西晋		
	東晋	十六国	

- 司馬遷著の史記には、斉人徐市（福）と記す

- 徐福村の再発見をした中国江蘇省徐州市 徐州師範学院地理系教授　羅其湘の著書（日本語版）**「弥生の虹桟 徐福 」**によると
  - 少昊（しょうこう）顓頊（せんぎょく）の子孫とのこと
    - （少昊・顓頊は神話伝説の三皇五帝のメンバー）
  - 再発見のニュースが広まった後に、中国全土に離散していた徐福村出身者から56もの家系図が報じられ、羅其湘教授はその調査をおこなった結果、
    - 家系図がそろって顓頊からの家系を示した

瀛（えい）｜←　32代　→｜←　29代　→｜→　72-3代

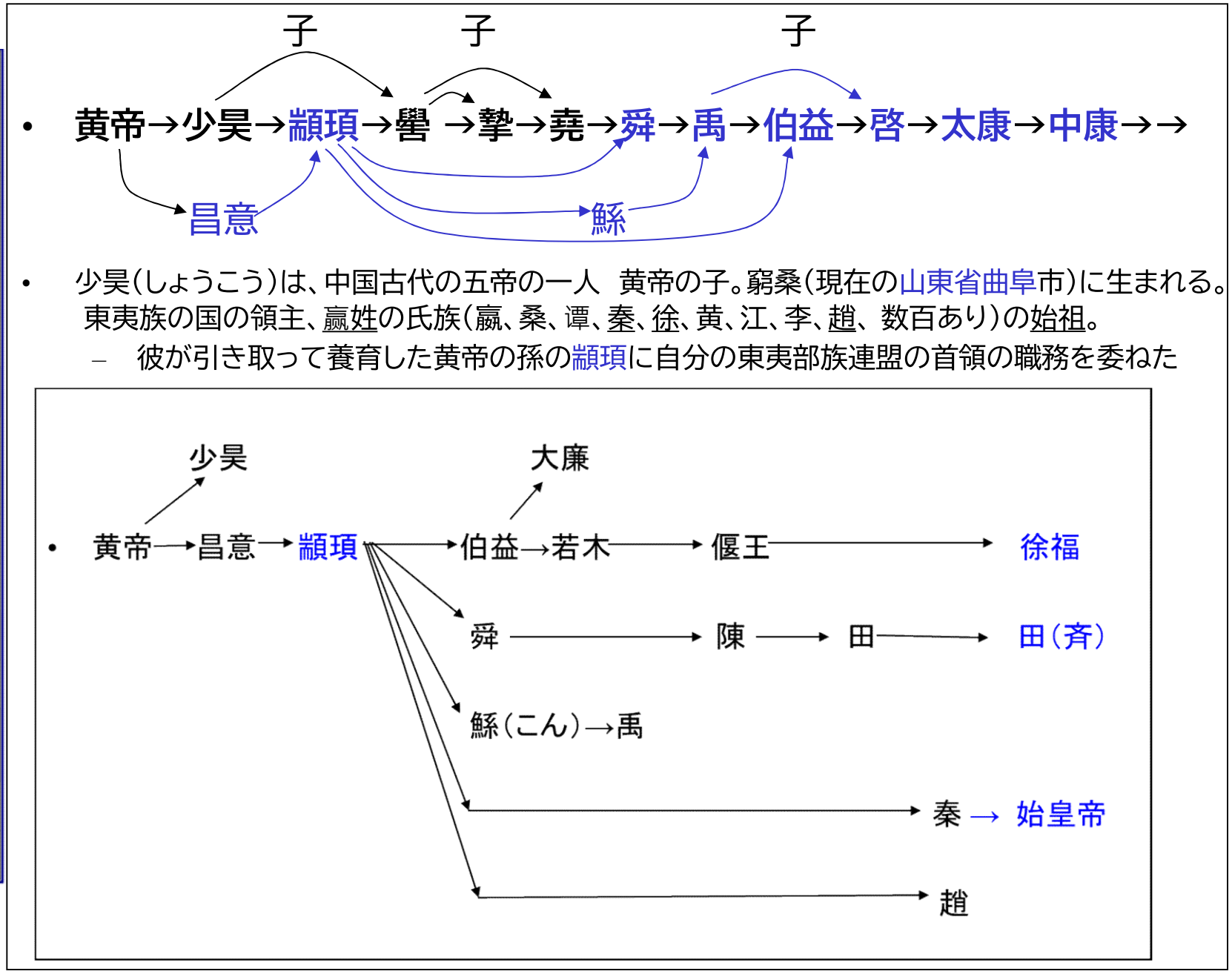
- **少昊→顓頊→→　→伯益→若木→→　→偃王→→　→徐福→→　現代**

｜→以降徐州を領地とし姓を「徐」とした

  - 伯益　：　堯、舜、禹の三代に仕えた賢臣。　禹のもとで宰相を務め、やがて禹から禅譲によって帝位を継いだ。　禹が没した後、3年の喪があけて禹の息子である啓に帝位を譲ったという。
    - 舜帝より”瀛“（えい）の苗字を受ける。
  - 夏の時代　：　若木は徐侯に、以降、徐を姓とする
  - 商（殷）の時代　：　徐一族は、侯爵、
  - 周の時代　　：　偃王は、殷の復活を目指した。（徐夷の乱）
    結局は楚に破れ、死亡。（紀元前1000年頃）
    一族は旧徐州各地に離散

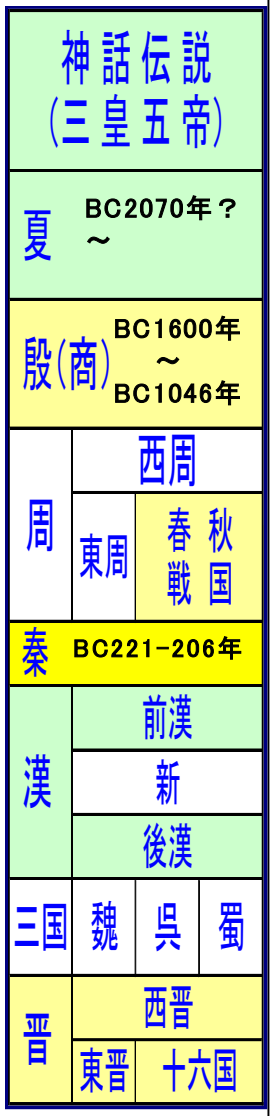
- 徐福の祖先は、中国神話の時代の帝王に遡る。下って、夏の時代の舜・堯・禹を支え、一時期帝王の座に着いた伯益。　商（殷）・周の時代まで徐州の王。　徐福は、その直系の王族の子孫。

黄帝からの系譜と顓頊(せんぎょく)の末裔



- 少昊(しょうこう)は、中国古代の五帝の一人　黄帝の子。窮桑(現在の山東省曲阜市)に生まれる。東夷族の国の領主、嬴姓の氏族(嬴、桑、谭、秦、徐、黄、江、李、趙、数百あり)の始祖。
  - 彼が引き取って養育した黄帝の孫の顓頊に自分の東夷部族連盟の首領の職務を委ねた

春秋・戦国時代の肌寒い事実

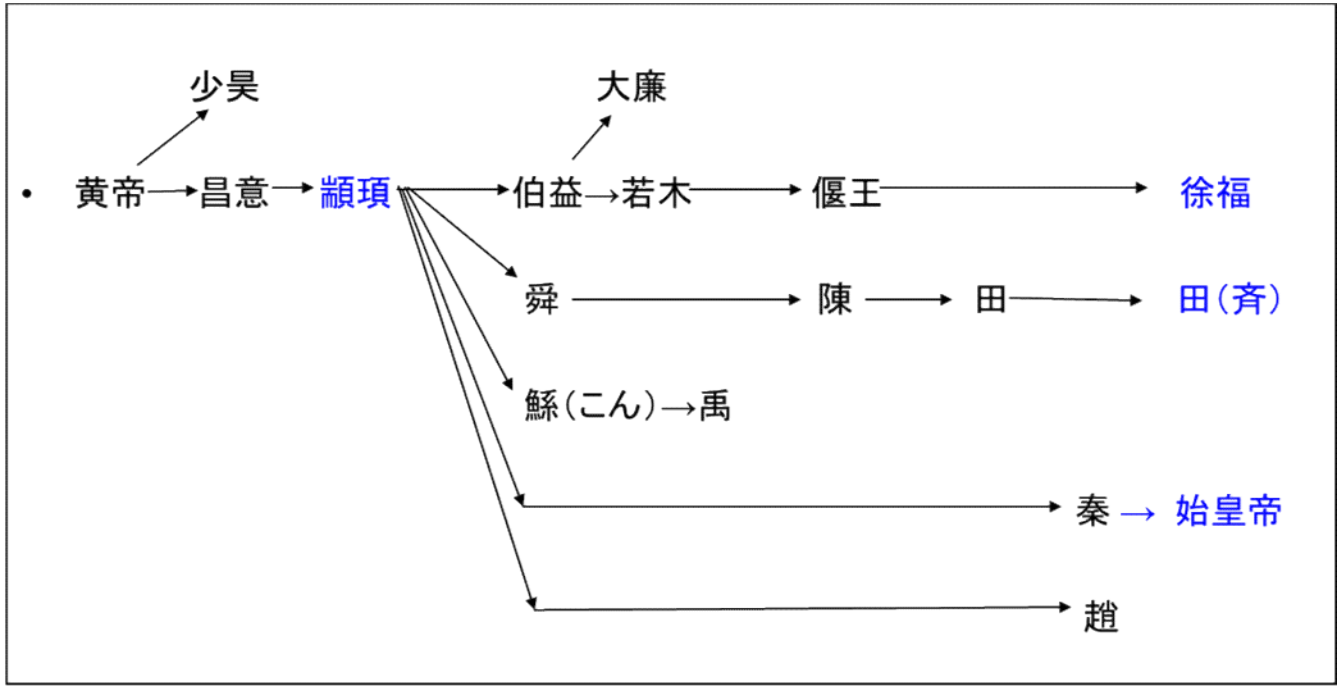


- 春秋時代は、BC770年、周が異民族の侵略を受けて都を遷した時から始まり、乱世の時代になる。
- 戦国時代は、BC403年、韓・魏・趙が生まれ、下克上の時代へ

- 春秋戦国では、何が起きていたのか？　（程　天良著　「徐福　霧のかなたへ」を参照）
  - **周は、黄帝以来の皇帝・王家に継がる一族を尊重し、諸侯とし領地を分配**し、封建制度を敷いた。 これは、血統の存続を意味した。
    - 170あまりの国々が存立した。
  - 春秋時代には、この170国が自国の利益のために、貪るように互いに虐殺しあった。
    → 「春秋の儀なき戦い」
  - 200余年の間、数百の大小の義なき戦いの末、160余カ国は前後して滅んだ。
    - 170の皇帝・王家に連なる血統のうち、大半がこの時点で断絶した。
  - 戦国初期には10カ国となり、斉・楚・秦・燕・韓・趙・魏の「七雄」の絶え間ない殺戮が繰り返された。
  - 戦国時代は、秦が残り9カ国を殺戮し、滅ぼしたことで終了する。
    - この時点では、秦を除く殆どの皇帝・王族の血統は失われた。
    - 例外的に、徐などの血統が残されたと云える。

- 春秋戦国の時代は、黄帝以来の血統とそれに連なる一族が、撲滅を受け、絶滅した時代と云える。
  - 勝ち残った始皇帝の秦一族と始皇帝が海外に派遣した徐一族、
  - しかし、その後、始皇帝が死に、秦が滅ぶ時、秦の一族は虐殺され、全滅した。

コメント
：
Y-DNA遺伝子の分布を含む



- 上図に連なる系譜の人々の末裔はどうなったか？
  - 秦 → 始皇帝の死後、楚の項羽は、最後の王の子嬰と秦の諸公子宗族を殺した、
    又、降伏した秦軍の二十数万人を新安の南で一挙に穴埋めに、抹殺した。
  - 趙 → 紀元前273年 秦は、魏に侵入し、敵の首13万を切った。 趙の士卒2万を黄河に沈めた。
    - » 紀元前260年 秦は、趙との「長平の戦い」で勝ち、降伏した40万人の士卒をことごとく生き埋めにした。
    - » 紀元前234年 秦（始皇帝）は、趙を攻め10万の首級をあげた。 趙の一族は、抹殺された。
  - 徐と陳（田）の一族だけは、中国を脱出するか、中国全土（南方・台湾など）に離散し、生き延びた。
  - **漢朝には、6000万人を数えた中原の人口が、その後、500万人と1/10以下に減少した**事実を考え、春秋戦国・秦・漢の大混乱期を推察すると、海外逃避をしなかった上記の一族の殆どが抹殺されたのではないかと思える。
    - 但し、斉の隣国の魯に生まれた孔子の一族は、現在まで健在で、中国一古い家系と呼ばれ、賞嘆されている。
- Y-DNA遺伝子
  - 日本人の25%を占める**O2b1**は、顓頊の系統。 朝鮮・韓国人の約30%を占めるO2bは殷の系統。
  - 中国（漢人北京）では、 **O2b1**は0%で、**O2b**は6.2%。 中国の民族抹殺の歴史の凄さを物語るものと思える。
  - 中国のその他の地域ではO2bの系統は、0%で、O2aの系統が南の方に分布する。

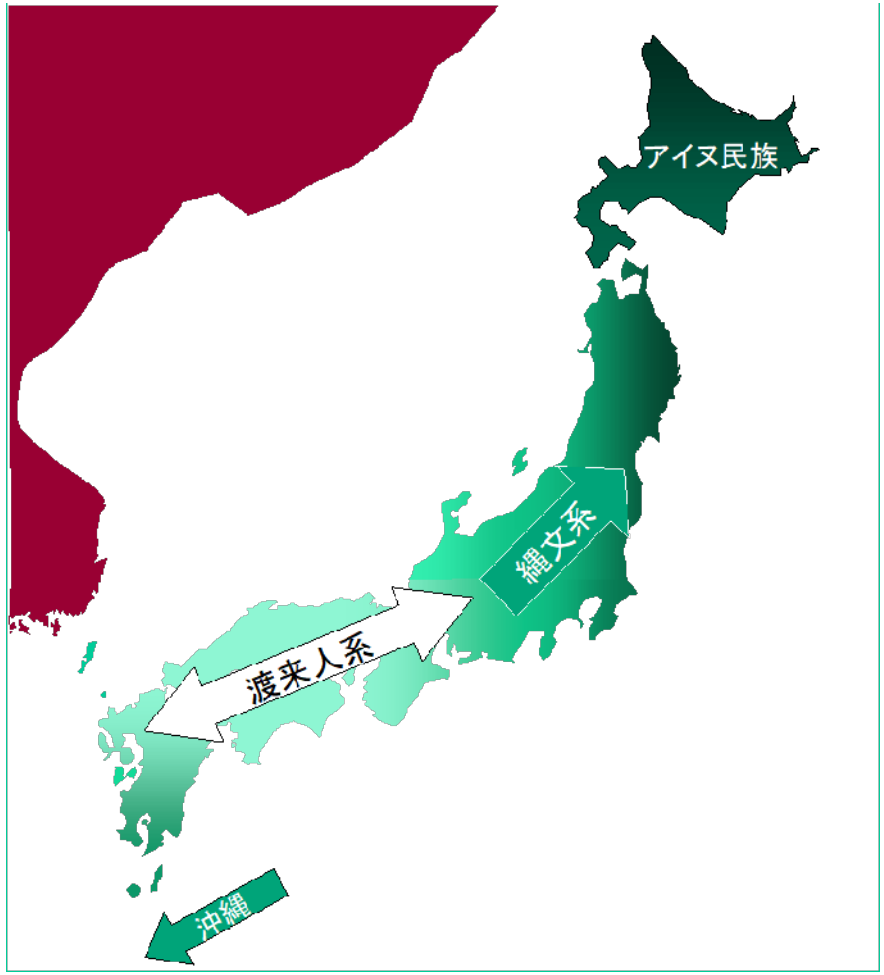
倭人の渡来元と徐福の拠点は一致　　次の課題は？

- 日本人のもう一つの祖先：弥生渡来民は、倭人で、その渡来元を探ってみたが、倭人の骨格・体躯、甕棺、米の品種、Y-DNAなどは、いずれも、中国山東省付近の可能性を示した。徐福の居住した徐福村がその山東省：山東半島の付け根、神連雲港付近に見つかり、徐福とその一族が、倭人であった可能性が高いことが判明した。

- 徐福の一行が、史記の淮南衡山列伝の示すように、子供達3000人を連れて日本に到達していたのならば、移住と考えると、合計渡来人数は1万人を超えることが推定される。
  - では、BC219年とBC210年の2回の到来した倭人が、弥生時代の末期までに人口100万人超になれたのか？　この疑問が生まれてくる。
  - 埴原和郎の100万人渡来説では、日本国内の人口増加では不足し、長期間・継続的に渡来人が来たとのしている。

- 徐福一行が、BC210年に1万人で渡来し、400～500年で、百万人の人口になるか、検討してみる。

縄文末期から古墳時代までの人口



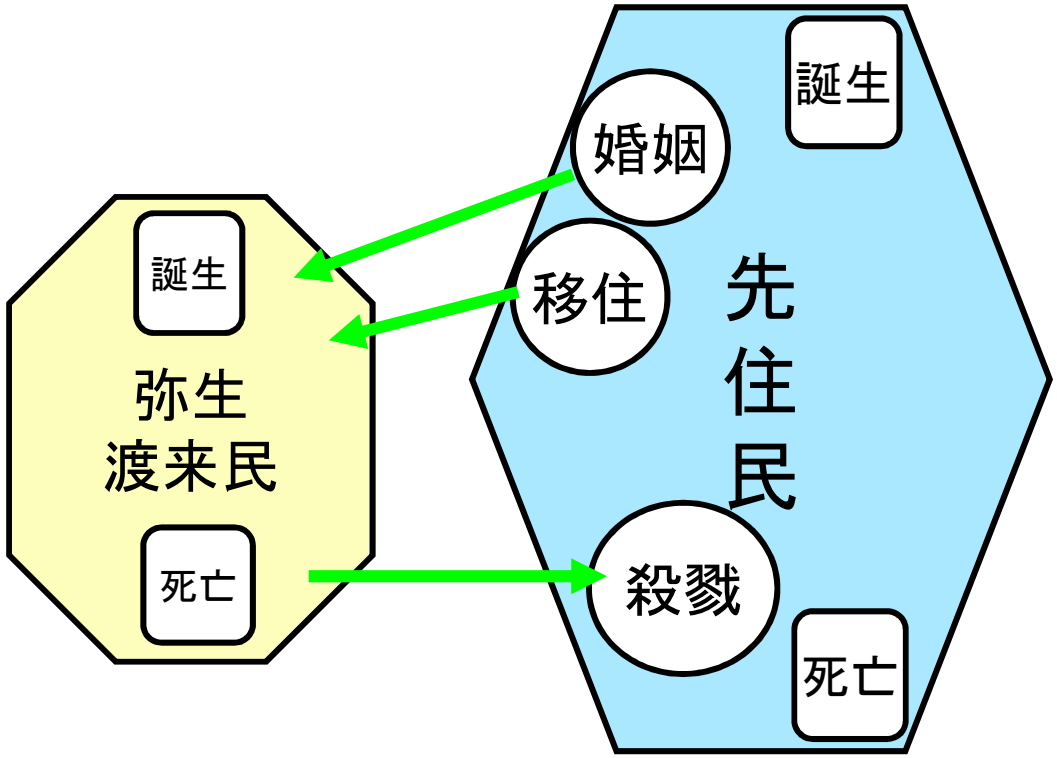
埴原 和郎の日本人二重構造論を図示したもの

- 鬼界カルデラの噴火(約6,500年前)で、縄文末期には、西日本の縄文人は極端に減少していた
  - » 小山修三(1984)
  - 西日本:少なく → 10,900人
  - 東日本:多い → 64,900人
  - 弥生時代末期全国で 約60万人と計算
    (2000年の講演資料で) **100万人超と修正**
  - ✓ この人口の数値に、徐福論が合致するかを検討する必要がある。

- 埴原氏は、弥生から古墳時代にかけて起こった急激な人口増加は、
  - 一般の農耕社会の人口増加率(年率0.1～0.2%)では説明できず、
  - この間、100万人規模の渡来人の流入があったはずだ、とする大量渡来説も提唱している。

- 人口増加率の問題に加えて、左記の日本人二重構造モデルの分布差の問題を解消するには、単純なシミュレーションでは、成り立たない。

弥生渡来民/先住民の集落間の人口増減モデル



- 弥生渡来民の集落と、隣接する先住民集落の間には、相互に関与があったと想定される。

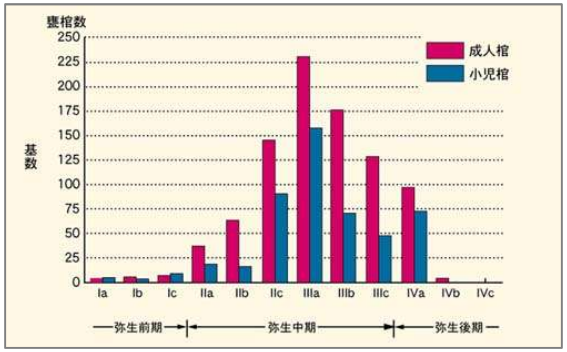
- 自然人口増加率
  - 堅果類栽培の「先住民」→　小
    水田稲作の「渡来人」　→　大
- 婚姻－先住民　→　弥生集落へ
- 移住－先住民　→　弥生集落へ
- 殺戮　渡来⇔先住民の争い
  →先住民死亡

弥生時代の人口増加率

http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/publications/special_exhibitions/WAJIN/164.html

■墓数の変化から見た人口増加率■ （中橋孝博）

福岡県下では最大規模の埋葬遺跡である筑紫野市の隈・西小田遺跡で計算すると、
弥生時代中期前半には、年率1%前後で人口が増えていたことが
明らかになった。



人口増加率

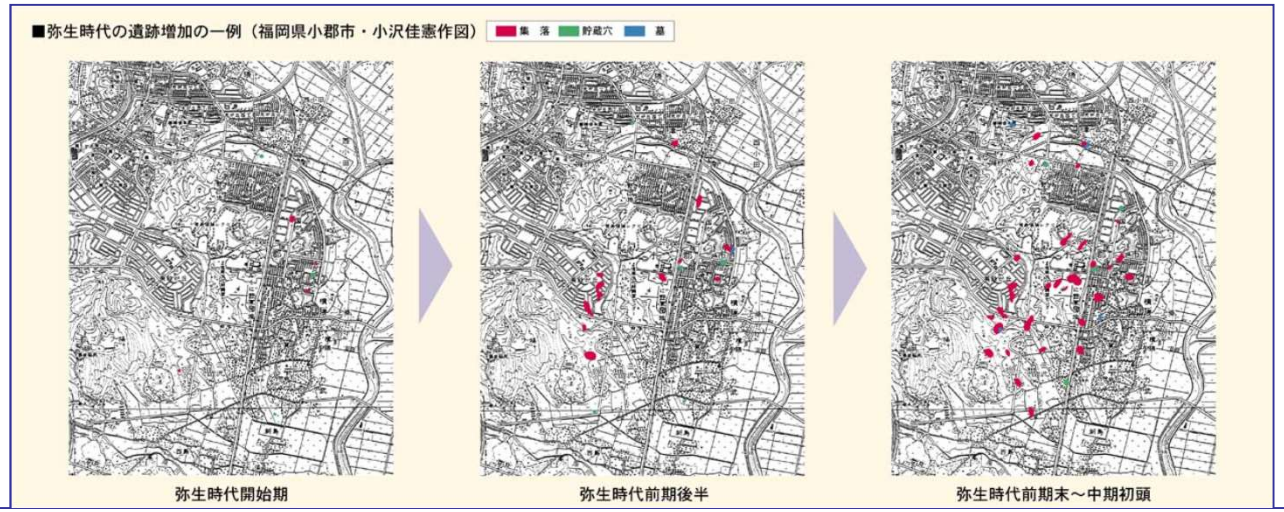
地域	甕棺数＊＊ IIb	甕棺数＊＊ IIIa	人口増加率＊＊＊（%）
筑紫野＋春日＊	112（226）	206（415）	0.81（0.81）-0.68（0.68）
筑紫野＋春日＋福岡	153（324）	394（725）	1.26（1.07）-1.05（0.89）
筑紫野＋春日＋福岡＋小郡＊	203（415）	441（820）	1.03（0.91）-0.86（0.76）

注＊：筑紫野：筑紫野市、春日：春日市＋太宰府市＋那珂川町、小郡：小郡市＋鳥栖市
＊＊：成人棺数、（ ）は、小児棺を加えた全体数。
＊＊＊：年代幅を75年と90年で計算、（ ）は小児棺も加えた全体での結果。

http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/publications/special_exhibitions/WAJIN/165.html

■弥生人の人口増加■

考古学では、弥生時代の始まりからしばらくたった前期後半～末の時期に、各地で遺跡の「爆発的増加」があったことを明らかにしている。
弥生時代の始まりの時期に7ヶ所であった遺跡が、前期後半には15ヶ所、前期末～中期初頭には34ヶ所に増えている。
また、図のように遺跡の面積・規模は、前期後半から大きくなっており、実際には1.00%をもこえる高い人口増加率であった。



人口増加を数値モデル化し、シミュレーション

	先住民族の集落	単位	弥生渡来民の集落	単位
初期人口	10,000	人	X	人
自然増加率	0.1	%	1	%
婚姻・移住			1	%
殺戮	0.5	%		

年	先住民の集落			渡来集落に組込まれた人	渡来人の集落						
	集落合計 ＋増－殺－組	自然増	殺戮された人		自然増	集落合計 +増＋組	渡来人DNA		先住民DNA		（渡来＋先住民）比率
		人数	人数	人数	人数		人数	比率	人数	比率	
0	10,000					100					
1	10,008	10	1	1	1	102	101	99%	1.0	1%	100%
2	10,016	10	1	1	1	104	102	98%	2.0	2%	100%
3	10,024	10	1	1	1	106	103	97%	3.0	3%	100%
4	10,032	10	1	1	1	108	104	96%	3.9	4%	100%
5	10,040	10	1	1	1	110	105	96%	4.9	4%	100%
6	10,048	10	1	1	1	112	106	95%	5.8	5%	100%
7	10,056	10	1	1	1	114	107	94%	6.8	6%	100%
8	10,064	10	1	1	1	116	108	93%	7.7	7%	100%
9	10,072	10	1	1	1	118	109	93%	8.6	7%	100%
10	10,080	10	1	1	1	120	110	92%	9.5	8%	100%
11	10,088	10	1	1	1	122	112	91%	10.4	9%	100%
12	10,097	10	1	1	1	124	113	91%	11.3	9%	100%
13	10,105	10	1	1	1	126	114	90%	12.2	10%	100%

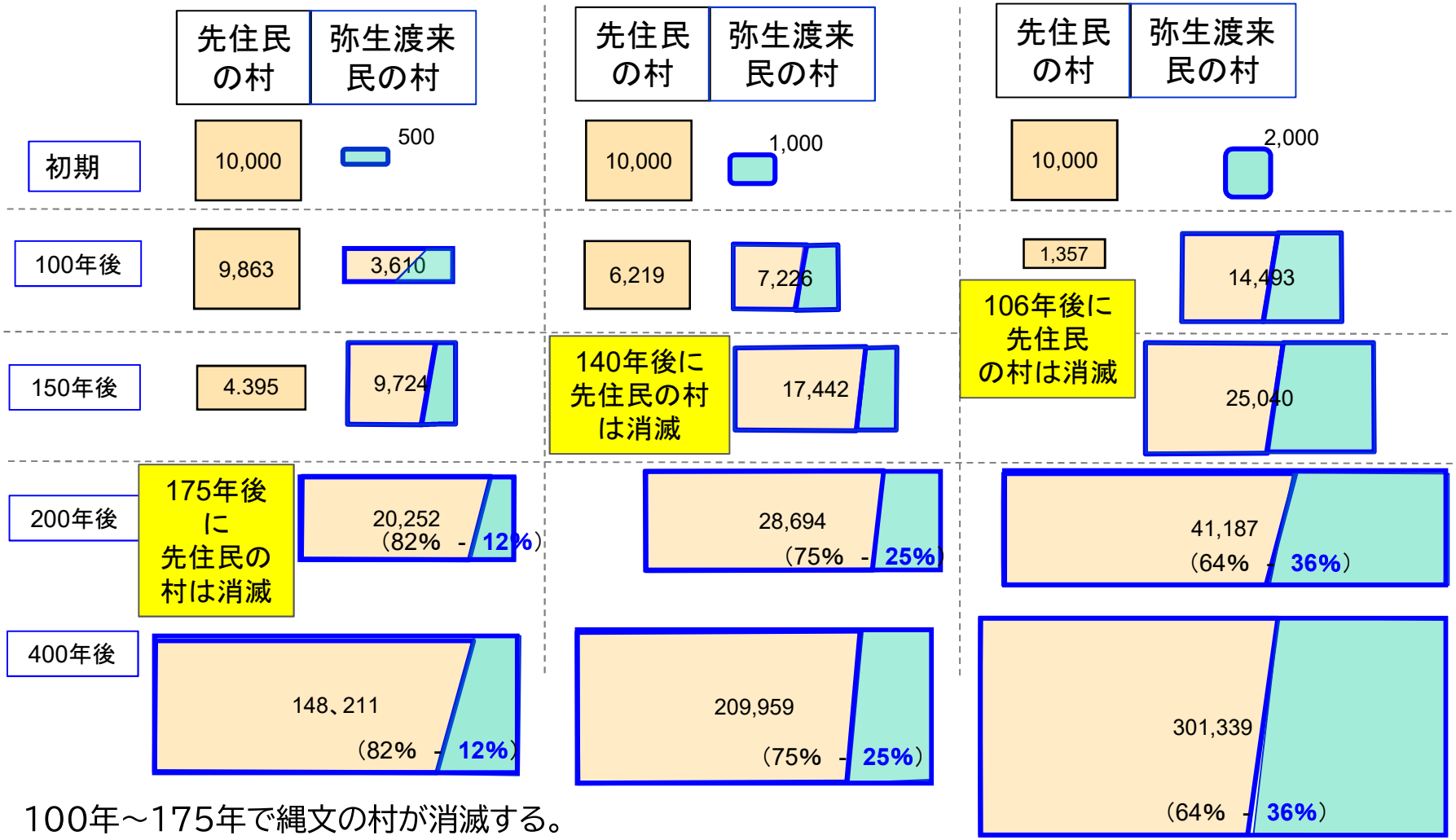
この表の年数を200年～400年に増やし、50年／100年／150年／200年の時点の数値を、取り出して、表として算出する。

- 初期の先住民の数を10,000人とし、渡来集団の数は100から2000人まで変化し試みる
- 自然人口増加率は、弥生渡来人を年率1%とする。
  - 1950年から1960年の年率が1.2%。
  - 弥生中期の九州隈・西小田遺跡の年増加率1.09～1.31%
  - 先住民の自然増加率は、停滞気味の0.1%とした。
- 婚姻などの目的で渡来集団に組み込まれた人の数は、渡来集団の人数の1%／年とする。
- トラブルにより殺戮される先住民の数を、渡来集団の人数の0.5%／年とする。

Excelを用いて、各年の人口の変化を算出し、50年～200年の推移を表とする。

何人の渡来人が来たのか？

- 1万人の住む先住民の村の近隣に、500人・1000人・2000人弥生渡来民の村が出来た場合を想定し、数値シミュレーションを行なってみると、



- 100年～175年で縄文の村が消滅する。
  - これは、縄文言語も同時に失われることも意味する。
- 主体は弥生人・倭人となるが、混血が進み、縄文人のDNAが残される比率が初期人員数によることが判る。

人口シミュレーションを全国へ適用

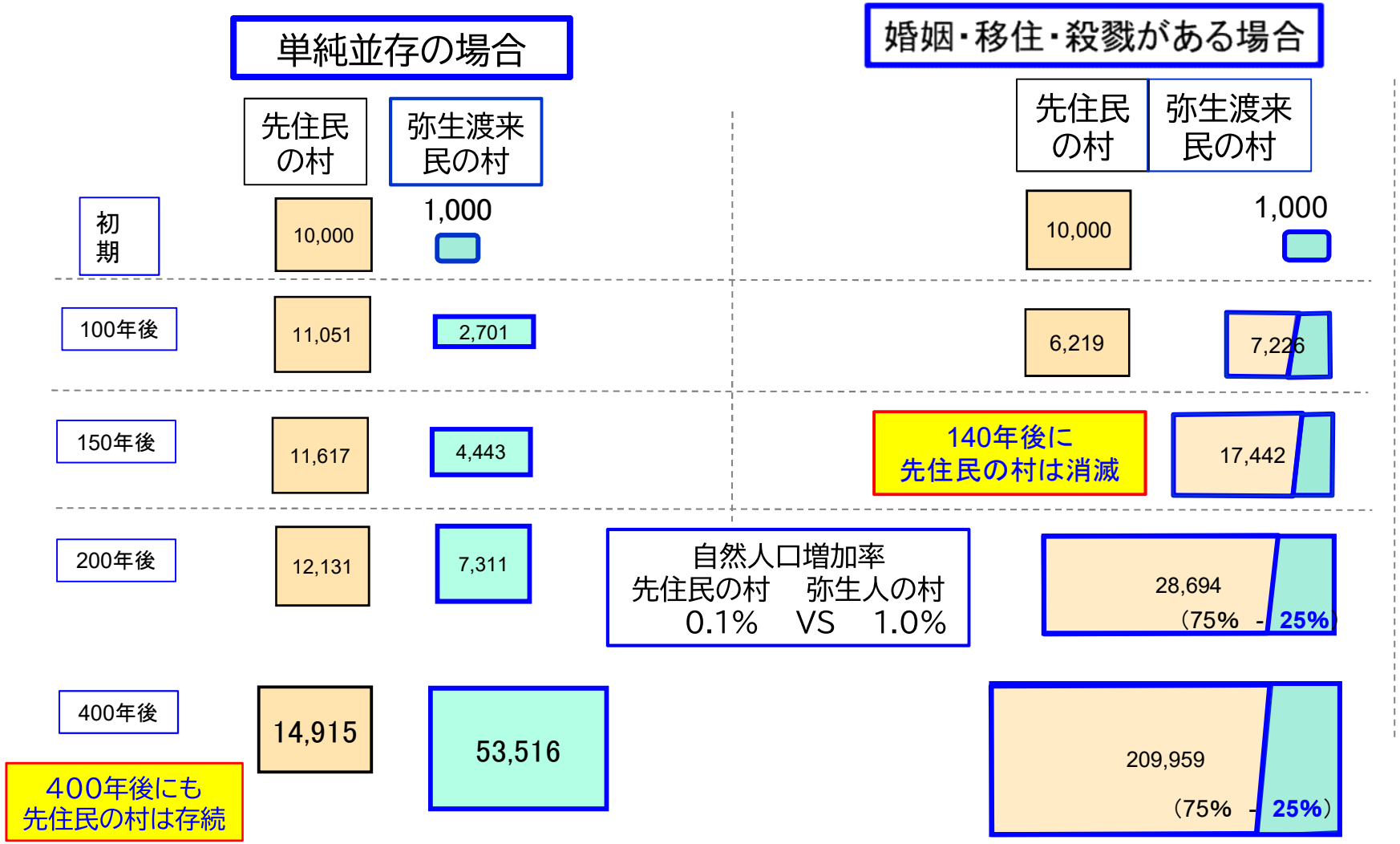
- 初期人口を、500人、1000人、2000人としたシミュレーションを、日本全土に当てはめ、九州と近畿に初期人員を多く配分してみると、下記のような表になる。

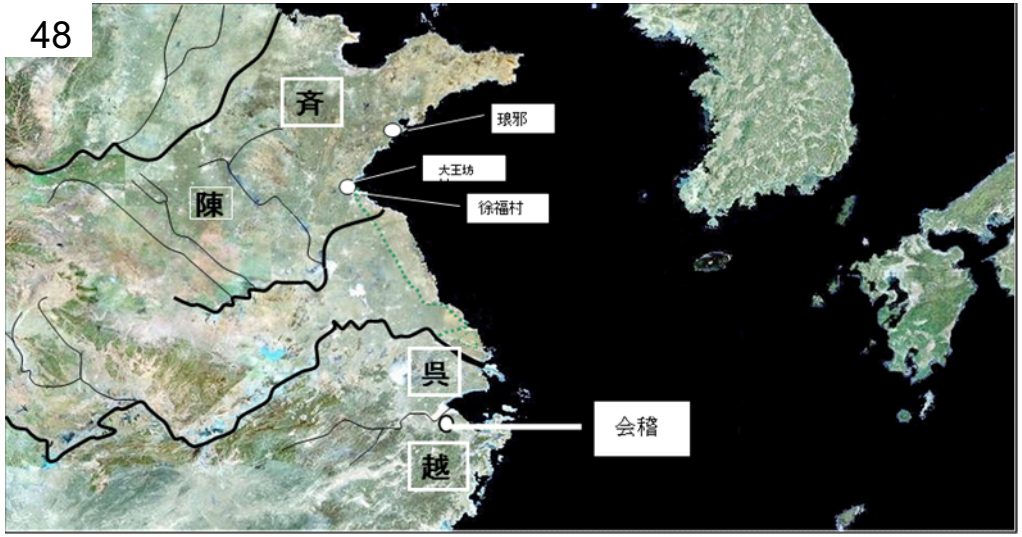
	九州2か所		瀬戸内	近畿	太平洋側			日本海側			合計
縄文人	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	100,000
初期弥生人	2,000	2,000	1,000	2,000	500	500	500	500	500	500	10,000
100年後	15,850	15,850	13,445	15,850	13,473	13,473	13,473	13,473	13,473	13,473	141,833
150年後	25,010	25,010	17,442	25,010	14,119	14,119	14,119	14,119	14,119	14,119	177,186
200年後	41,187	41,187	28,694	41,187	20,252	20,252	20,252	20,252	20,252	20,252	273,767
400年後	301,339	301,339	209,959	301,339	148,211	148,211	148,211	148,211	148,211	148,211	2,003,242
	602,678		209,959	301,339	444,633			444,633			
	36%		25%	36%	12%			12%			24%

- 上記を見ると、徐福一行がBC219年に到来し、各地に分かれて、上陸、入植したとすると、400年後の西暦200年頃には、200万人との数値になり、十分な弥生時代の人口になる可能性が示された。
- 九州から近畿で、弥生人の比率が多くなり、その他の地域で少なくなり、二重構造にも合致する。
- 全地域で、全て順調に人口増加できなかった事情も発生したであろうと思われ、これより少なかったり、地域ごとのバランスが崩れることもあったと推測する。
- しかし、全体として見て、一時に、約1万人の倭人：徐福一行が到来すると、弥生時代の人口になることと判断できる。

単純に自然増加率で算出した場合

- 1万人の住む先住民の村の近隣に、1000人弥生渡来民の村が出来、相互干渉が無く、双方のムラは自然増加率分だけの人口増減があった場合との比較。





民族移動を可能とする船舶と航行技術の有無？

徐福の居た 斉の国・琅邪の船舶に歴史

- 斉の国は、塩・鉄の産地で、造船・海運・海軍の技術の最も進んだ国で、優秀な海軍を持っていた。
  - BC500年：斉の国とその南方の呉と越が、「海上の三強」と称された。
  - BC485年：中国史上、初の本格的な海軍の戦争・海戦で、呉王が水軍を率いて、斉の海域で戦った。
    - » 呉が破れ、勝った斉は「海王の国」と呼ばれた。
  - BC482年：越は2千人の水軍で呉を攻め、滅亡。（負けた呉の一部が、韓国と日本へ逃れた。）
  - BC472年：越は8000の水軍と300隻の軍船で、斉に遠征し、勝利を収めた。
    - » 何と、越は、都を本拠地の会稽から斉の国の瑯琊に移した。
      - その結果、越の、船舶の設計・造船・操舵の技術の粋が、斉の瑯琊に集結。
  - BC334年： 130年後に、越は、滅亡し、海軍・海運の技術が斉の国に残され、集約された。
  - BC221年：中国を統一した秦の始皇帝は、斉の国、瑯琊に、集約された造船・海運・海軍の技術を活用。
- この頃の記録に残る春秋・呉の軍船は、長さ十丈（30m）巾1.52丈（4. 6m）、90人乗りだった。 徐福が出帆する以前に、これだけの大きさと収容人数をもった船舶が、この地域で作られ、運用されていた事が判る。
- 斉の国は、戦国時代、製鉄事業で、全国をリードしていた。徐福村からは、鉄製の道具とおびただしい冶金の鉄の塊が発掘され、造船に必要な基礎が、斉の国にあったことは明らか。
- 徐福村の東北にある王坊村は、徐福船団造船遺跡と云われる。古代の造船用の良材が炭化して出土、この村の地下には広く、この造船用材が広く埋もれており、膨大な量と云われる。
- 始皇帝が、自ら「費やすこと巨万」といった莫大な財力と製鉄・造船の技術が結びつき、この大量の人員を送り出す船舶を作り送り出すことができたものと推定。

秦代の造船遺跡

- 秦代造船遺址_百度百科より、右図、文訳抜粋
  - 廣州市中山四路市の文化局内で、1975年に発掘された遺跡。
  - 東西300m。造船台が3台。1号台は長さ100m。2-3号台は未発掘。
  - 秦の半兩錢、漢初期の半兩錢、秦・漢の瓦や陶器なども出土。
  - 秦始皇統一の時期に建造され、西漢の初めに廃棄された。
  - 当時の造船能力　幅の8メートル、長さ30メートル、積載重量の50-60トンの木造船。
  - 秦始皇は、嶺南平定の時期に、大量の船舶を建築して、瓯越平定のため供給した。（西瓯越は珠江河口流域にあった）

秦代造船遺跡

✓ 秦の始皇帝の統一時に急遽作られた造船所で、巾8m長さ30mの船舶が、未開地の広州でこれだけの建造技術があることから、斉付近の先進地帯の造船能力はこれ以上であったと推測できる。

指摘された課題の内残るもの

- トンデモ「研究」とする批判で指定された課題
  - ① 最古の水田稲作は、徐福到来よりも200年も前。矛盾。
  - ② 漢字の使用は5世紀からで、徐福が渡来してから遅れ過ぎる。
- 基本的な疑問
  - ③ 秦の始皇帝が何故、巨額の費用を使い、徐福一行を派遣したのか？
    - 徐福一行：倭人達は、徐福伝説を残すが、もっと明瞭に、渡来した伝承を残さなかったのか？
- ①②の課題については、次頁以降記す
- ③の課題は、今回は、解決策は示さないが、検討材料と興味深い項目を示す。

最古の水田稲作稲作は、徐福到来よりも200年も前

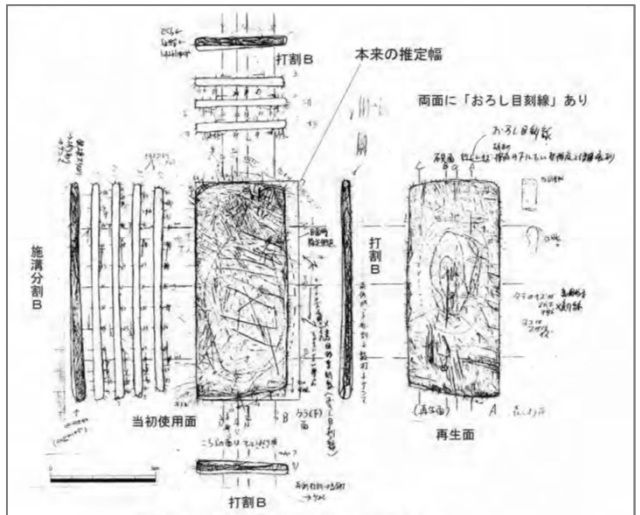
- イネの品種の処で示したが、日本への水田稲作は、時期を隔てて、2回到来している。
  - 初回は、朝鮮半島に到来していた水田稲作を、西北九州縄文人が、取り入れたもの
    - イネの品種は、元々中国の呉(春秋)の松澤・銭山漾遺跡の品種と同一のもの→極短小米
    - 朝鮮半島へイネと耕作技術をもたらした人々は、春秋呉の戦争難民
      - 同時に、碁盤型支石墓の習俗・土器・青銅器などももたらした。
    - 西北九州縄文人は、海洋民族で、朝鮮半島との交流があり、使用していた黒陶は朝鮮半島でも出土。
    - 主要遺跡は、唐津・菜畑/糸島・曲り田・新町/博多・雀居・板付
    - その墳墓の形式は、碁盤型支石墓
      - ✓ 倭人との戦いに破れ、民族とその稲作文化は、残念ながら、継続せず消滅した。
  - 次回は、徐福一行・倭人達が持参したイネと水田耕作技術
    - 初回の主要遺跡の唐津・菜畑/糸島・曲り田/博多・雀居・板付付近では、戦争遺跡(遺骨)が発掘される。
      - 糸島の新町遺跡などでは、縄文人の戦傷遺跡が残る(縄文人が戦争で、勝ったが、当人は負傷・戦死)
        - 新町遺跡の村は、その後、倭人に乗っ取られ、墓地は、支石墓から甕棺に置き替わる。
      - 全ての初期水田稲作遺跡では、一斉に、土器形式が、突帯文式土器から遠賀川式土器に替わる。
      - 全ての初期水田稲作遺跡では、イネの品種が極短小米からやや長い小粒米に替わる。
      - 碁盤型支石墓から甕棺墓に替わる。

- 水田稲作が2回に渡り渡来したことが有り、徐福一行:倭人が到来した時期に、本格的水田稲作が、変わり、一気に全国展開した。
  - 従って、トンデモ「研究」とする批判で指摘された、水田稲作は徐福に起因しないとする課題は解消される。

漢字の使用は5世紀からで、徐福が渡来してから遅れ過ぎる

- 漢字渡来：従来からの定説
  - 和邇吉師（わにきし）が、『論語』十巻と『千字文』一巻、合わせて十一巻をもたらした。

- 日本での漢字使用の証拠
  - 魏志倭人伝に多くの記述があり、魏の使者到来の西暦240年には、使用されていた。
    - 税制があること　→　文字が前提の制度
    - 輸出入文書　：　港では書面と貨物・荷物が一致するか確認していたとの記述があり、文字の使用の証拠
    - 外交文書：　女王が返礼の文書を魏の使者に渡した記述がある。



西新町遺跡22次64号土坑出土板石硯Ａ

  - 硯の発見
    - 古墳時代における「板石硯」の展開について（予察）　久住猛雄著　には、多くの硯が弥生遺跡で発見されたことを記載
      - 弥生時代中期中頃から古墳時代の「方形板石硯」（柳田康雄 2019 ）の発見が相次いでいる。発見された地域は、北部九州（壱岐、筑前、肥前、豊前、日田）を中心に、山陰地方～丹波、瀬戸内海沿岸、大阪湾岸、奈長盆地、伊勢湾岸、北陸西部（加賀）、肥後（阿蘇）にまで及んでいる。
  - 倭人の言語
    - 中国で使用された言語の検討で示したように、極めて多くの言語が中国で使用され、覇権を取った王朝も暫時代わり、言語が変遷したとみられる。しかし、その伝統・統一を保ったものは、書き言葉の統一。漢字・漢文が古代王朝以来、統一的に使われたと見られる。
    - 日本でも、平安以降江戸時代まで、書き言葉として、連綿と漢字・漢文が使用された。その伝統を持った倭人達は、渡来の当初より、倭語を話、漢字漢文を書き言葉として使用してきたと考えられる。

- 従って、魏志倭人伝の記述と硯の発見は、漢字・漢文使用の証拠となり、トンデモ「研究」とする批判は、解消する。

文字の使用 （伊都国人と文字 - 第4回伊都国フォーラム資料より図借用3枚）

- 外交文書、輸出入文書や公文書が、女王国で使われていたことは、彼等が漢文と漢字を操っていたこと疑問は無い。
  - 日本人の言語能力： 日本語を話し、漢文を読み書きできることが、教養人・官の必須素養。
  - 古代から江戸・明治まで、必須能力であったと思われる。卑弥呼の時代に倭人伝に記されている。
- 文字を書いた証拠である石硯（弥生時代）が複数出土している。
  - ・糸島市三雲番上遺跡 ・ 筑前町薬師ノ上遺跡
  - ・ 東小田中原遺跡 ・島根県松江市田和山遺跡
- 土器などに刻まれた又は墨書きされた文字が多数出土。

図6 筑前町薬師ノ上遺跡石硯（柳田・石橋2017）

遺物	遺跡名	所在地	文字	時期	備考
土器片	大城遺跡（だいしろ）	三重県津市	奉（or年？）	2世紀前半	刻書、高杯の脚部
壺	貝蔵遺跡（かいぞう）	三重県松阪市	田	2世紀末	胴部に墨書
甕	三雲・井原遺跡	福岡県糸島市	竟	3世紀中頃	口縁部の刻書
甕	大戌亥・鴨田遺跡	滋賀県長浜市	卜？	3世紀中頃	胴部に刻書、逆向き？
土器片	根塚遺跡	長野県木島平村	大	3世紀後半	刻書
無頸壺	市野谷宮尻遺跡（いちの やみやじり）	千葉県流山市	久	3世紀末	口縁部に墨書
木製品	柳町遺跡	熊本県玉名市	田	4世紀初頭	短甲の部材に染料or焼きゴテ？横書き？
小型丸底壺	片部遺跡	三重県松阪市	田	4世紀初頭	口縁部に墨書
壺（参考）	貝蔵遺跡（かいぞう）	三重県松阪市	人面？	3世紀初頭	胴部に墨描

表1 弥生時代から古墳時代初頭の文字資料

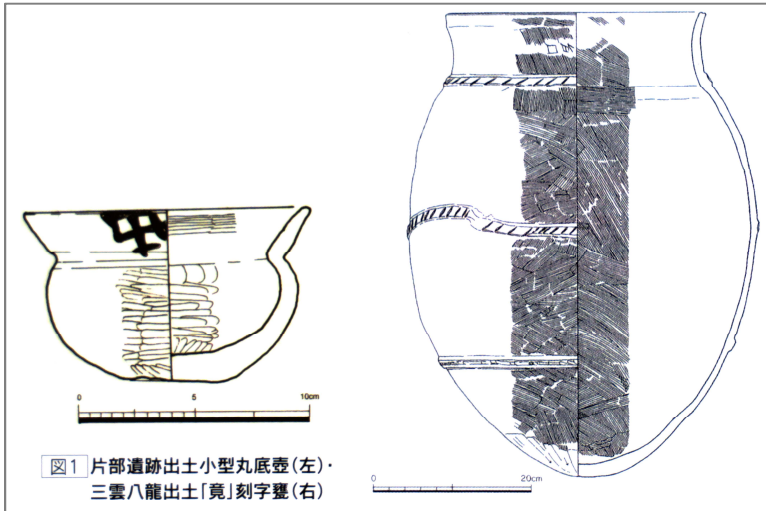


図1 片部遺跡出土小型丸底壺（左）・三雲八龍出土「竟」刻字甕（右）

基本的な疑問の解明

- 秦の始皇帝が**何故、巨額の費用を使い、徐福一行を派遣したのか**？
- 徐福一行：倭人達は、徐福伝説を残すが、もっと明瞭に、渡来した伝承を残さなかったのか？

- この2点が示す徐福論の最も基本的問題は、徐福の事件発生後、100年の頃に、現地に数回行き、現地調査を行ったはずの司馬遷ですら解らなかった課題と云える。
  - 更に、中国の歴史家達が、興味を持ちながら、1982年6月徐福村が発見されるまで、伝説として半信半疑であったことを考えると、解決は困難に見える。

- 解明されるとすると、別件の発見が無いとやはり難しい
  - 関連する発見は有ったのか？
  - 先端科学の発見が、その事実をサポートしている。
  - 地道な言語学の成果が、サポートしている。

✓ 新な発見 ： **タカラガイの産地**が解明されたこと。 近年まで、多くの中国人学者や日本人の学者が究明のため仕事をしてきたが、相変わらず、不明のままだったが、**沖縄産**であることが判明。

✓ DNA関連の学者が、多くの疑問を提示
  - 大阪医大の松本秀雄博士 **沖縄・宮古島住民のGm遺伝子が極めて古い**ことを指摘
  - 日沼 頼夫博士が、**成人T細胞白血病のウイルス**を調査し、縄文人の子孫で、弥生渡来民の遺伝的影響を受けていない人が羅病することを発見。 沖縄は、羅病者が多いが、**宮古島だけ、居ない**ことを指摘。

✓ 琉球語： 日本語の唯一の類似言語は琉球語で、琉球語と日本語の分岐時期は平安時代ともいわれてきたが、フランスのThmas Pellard(トマ ペラール)は、その分岐時期を、「日琉祖語の分岐時代が 8 世紀以前, つまり 日本の有史以前, であるという結論に至る」とした。
  - 琉球語は、有史以前から、沖縄に存在していたことを明らかにした。

- これらの新事実からどうやって司馬遷が発見できなかった事実をさがせるか？ これは、別途の課題。

徐福論　まとめ

- 日本では歴史家が取り扱うことが無かった徐福論について話しました。

- 日本では単なる伝説ですが、中国では、遺跡・資料が発見され、事実となった。
  - 日本に急激な変化をもたらした弥生時代。
  - この時代をけん引した倭人：和人：日本人を検証してみる
    - 渡来した倭人の渡来元を調査すると、**骨格・甕棺・イネの品種・遺伝子などの4つ以上の条件に一致**することから山東半島・山東省が有力候補となった。
    - 徐福の居住地は、徐福村遺跡等から山東省・神連雲港市の付近と特定された。
    - 倭人の渡来元候補と徐福の居住地が一致することから、徐福達が倭人と判明。
  - 多数の人員を運ぶだけの**船舶と航海技術が、当時、出発地に存在した。** 一万人の渡来人が日本に来た場合に、**弥生時代末までに100万人を超える人口にまで増加可能**なことを、シミュレーションで確認された。
- 徐福一族は、中国側資料から、中国の古代夏王朝を築いた黄帝の孫と云われる顓頊（せんぎょく）の子孫と判明。
    - 因みに、同じ顓頊の子孫には始皇帝が居る。
    - 中国春秋戦国の時代を調べると、古代王朝に繋がる一族が率いた170国が、戦争で滅び、一族虐殺が繰り返され、残った9か国も、秦の始皇帝により滅亡・殺戮された。
    - この恐ろしい殺戮の時代に、最後まで生き残ったのが、秦の始皇帝と徐一族。
      - 徐一族は、日本に新天地を求め、倭人として生き延びた。
      - 始皇帝が死亡すると、秦の一族は殺戮・滅亡された。
  - 中国古代王朝の一族で、生き延びることができたのは、日本に来た徐福一族だけであったと思われる。
      - 徐福とその一族の日本への渡来目的は、上記から一族の存続であったと想像が付く。

- しかし、倭人達が自らの成り立ちを明らかにしなかったこと、秦の始皇帝が何故、徐福を探し出し、東の海に送りだしたのかは、不明のままになっている。
  - この謎が、別件と思われた発見等から解明の糸口が見いだせることになり、その解明が待たれる。